

KULIC

16

1982. 12

慶應義塾大学研究・教育情報センター

KULIC 16

目 次

新所長の抱負

1……………サービスの向上を目指して	大江 晁
4……………日吉図書館への期待	衛 藤 駿
6……………医学情報センター所長に就任して	嶋 井 和 世

8……………所長・館長13年を顧みて	高 鳥 正 夫
11……………スタンフォードにて<スタッフ・ルーム>	安 田 博

慶應義塾図書館（新館）の開館

12……………新館準備とPR	武 井 恵 子
17……………閲覧・利用サービスとその展望	中 島 紘 一
20……………雑誌・資料の利用サービス	中 島 紘 一
23……………情報サービスの課題	東 田 全 義
25……………選書課の誕生と今後の展望	東 田 全 義
27……………図書の収集と目録サービス	森 園 繁
31……………慶應義塾図書館（新館）利用者アンケート調査	風 間 茂 彦

35……………Dr. フレッド・リードのこと<ティールーム>	松 村 高 夫
36……………生みの苦しみ<ティールーム>	立 村 香 代 子

KULICのノウハウ

37……………医学情報センターにおける無断帯出防止装置の導入成績	宮 崎 貞 治
39……………Circulation System の機械化	藤 井 裕 子・西 山 知 子

43……………新図書館閲覧課にて<スタッフ・ルーム>	原 田 い づ み
44……………図書館とともに10年<ティールーム>	矢 島 和 男
45……………IMIC10周年雑感	高 田 宜 美

資 料

49……………慶應義塾図書館（新館）に関する書誌
51……………年次統計要覧<昭和56年度>

56……………編集後記	<表紙> 孫 福 弘	<カット> 日下部寿子
-------------	------------	-------------

サービスの向上を目指して

三田情報センター

大江 晃

(文学部教授)



1952年の初夏、私の乗っていたオランダの貨物船はアレキサンドリアの港に入った。暮れなずむ街のたたずまいを船上から眺めながら、私の頭に浮んだのは二つのことであった。ひとつは映画「望郷」の一場面、港の鉄格子につかまりながらくずれおちるジャン・ギャバン扮するところのペペ・ル・モコの姿である。折しも響く船の汽笛は、まさに、そのフィナーレを思いおこさせた。港の背後の丘のうえに盛りあがる白亜の家並は、まるで岩のように見えて、カスパの匂いを漂わせていた。

もうひとつは古代世界の文化を象徴するアレキサンドリアの図書館のことであった。ユークリッドが暮して、その『幾何学』を著し、また、アルキメデスやプトレマイオスが一時期を過して、研究にいそしんだのも、此処であった。イスラムの侵入とともに、その繁栄には終止符が打たれたとはいえ、この町が古代文化の栄光を彩るにふさわしい都市のひとつであったことは疑えない。カスパの背後には古代文化の見事な残照が映えていた。

ヨーロッパに暮していたあいだ、私の毎日はほとんど図書館で送られたと言ってよい。ソルボンヌの図書館、ポワンカレ研究所の図書室、さらに、ルーヴェン大学の図書館は私の生活の場であった。とくに、パリ郊外に暮していた私は、市の中央部にしかない学生食堂で食事をしてきた関係もあって、図書館で一日を過さざるをえなかったのである。当時ソルボンヌの図書館には、一時間以上席を明けると誰に座られても文句は言えない

という不文律があった。食事をすませて帰ると、すでに席がとられていることもしばしばあった。一時間以上経っていたときには、すすぐと退散して、キャフェで本を読んだ。本の借出に一時間以上かかることもままあったから、そのようなときには、食事に行くこともできなかった。

10年後にハーバードに行ってワイドナー図書館を利用するようになったとき、アメリカ大学図書館のユーザー・サービスの一端に触れて驚かされた。とくに、当時 information counter に居た Draper という婦人は、祖父が塾に教えに来たことがあるということで、たいへん親切にしてくれた。図書館にサービスというものが存在するという実感は、率直に言って、初めての経験であった。

このように書けば、塾の図書館関係の方々是不愉快に思われるかも知れない。事実、私が所長に就任して最初に感じたことは、塾の図書館がきわめてユーザー志向であるという点で、これは戦後のアメリカ式図書館教育の成果であろう。アメリカまで行かなくても、見る眼をもてば、見えたことであったのかも知れない。

この春、新館がオープンして、私は入口で多くの来訪者に挨拶をすることになった。正直のところ、私はホテルのマネージャーか百貨店の店長のような気分であった。しかし、まじめに反省してみると、図書館というのは本質的に百貨店に近いことに気づいた。図書館は本の百貨店だ、という表現はそんなに的外れとは思えない。図書館は十分な品ぞろえをしてお客さんの要求に答えなければならぬのである。しかも、ユーザーの探しや

すいように、また、質問に答えられるように準備しておかなければならない。私自身品ぞろえが不足しているとか、何処を探してよいか分らないといった苦情を抱いたことがあった。しかし、本の百貨店の重要な特質は、本という品物の不思議な特性にある。それはひとしなみに紙とインクから成るにもかかわらず、個々の書物は独自の個性を主張している。それを材質から分類することは不可能であるし、用途から分類することも容易ではない。

元来、図書館の機能は、書物という形での情報の収集およびその提供ということであろう。現今、メディアの多様化に伴って、いわゆる書物のほかにフィルム、テープ、レコードの類などが加わっているとはいえ、そのいずれも<情報の書き込まれている物>という点では、広い意味での書物の名に値しよう。

図書館のうちで、大学図書館は特殊ではあっても、その主要な位置を占めていると思われる。その理由は、大学図書館による情報の収集と提供とは、知識の再生産を目的として、知識のリサイクルの不可欠の一コマを形成しているからである。大学図書館は、たんに知識の啓蒙とか応用に止まるのではなく、新しい知識の創造源となることをその本来の使命としている。アレキサンドリアの図書館が真に図書館の名に値するのは、それがユークリッドの『ストイケイア』を、アポロニウスの『円錐曲線論』を、プトレマイオスの『アルmagest』を産む母胎となった点にある。大学図書館の真の使命は、大学の研究の活性化に寄与することであり、また、それを通して大学の教育に貢献することであろう。

このように見るとき、大学図書館にとってきわめて重要なのは、大学にとって本質的に要求される研究の自由を、図書館もまた、その独自の立場から擁護し、推進せねばならぬということである。情報の収集および提供の意図的な偏りとかためにする阻害とかは、もっとも戒めねばならぬことだと思われる。私自身深く自戒したいし、館員

の皆さんに対しても、この点に関してははっきりした自覚をもって下さるように、とくにお願いしたいと思う。

従来、わが国では、ともすれば、図書館は万卷の書の収蔵庫を意味し、そこで展開されるべきサービス業務が軽視される傾向があった。とくに、大学図書館においては権威的な態度が横行する嫌いがあったとは言えない。塾の図書館が規程上からもパブリックとテクニカルの二つのサービス部門に分れている点は、図書館におけるサービス業務の意味を積極的に認識していることを示している。図書館業務が学生を含めた研究者に対するサービス業務として明確に位置づけられ、利用者の要求に即応する姿勢を打ち出している点は、たんに規約の文言のうえだけでなく、館員の行動にも浸透していて、私が所長に就任して以来、とくに感銘を受けた点であった。今後とも、権威主義的、官僚主義的な傾向に陥ることなく、このサービス精神を堅持してゆくことを心がけたいと思う。

新図書館の誕生は、設計段階からこのような思想に裏づけられて、旧来にまさる充実したサービスを提供する機会と場所を与えるものと言ってよい。私をはじめ図書館に勤務する者にとって、今後の課題はこのような新施設をフルに活用することによって、情報サービスの内容を飛躍的にたかめることにあるが、この問題に関連する二、三の点について考えてみたい。

まずとりあげねばならないのは、図書館自体のシステムと業務内容に関する情報の提供ということである。これはしばしば利用者教育の名で呼ばれているが、この名称はなにやら威張った感じがあって、私は好まない。図書館側は、可能な手段と機会を利用して、提供できるサービスの内容について、また検索の手段と方法について、利用者へ情報を提供する義務がある。現に、リファレンス業務はもとより、講演会の形で利用者と接触を計ったり、目録ホールに係員が出て相談に応じているなどの試みはなされてはいるが、いっそう組

織的に充実した形でなされる必要があると思われる。このような努力が継続的になされぬかぎり、図書館は宝の持ち腐れになる危険がある。しかも、この種の情報は図書館側が積極的に提供しないかぎり、利用者はなかなか知る機会がないという点で、図書館側の自発的な努力が要求されるのである。

さらに、利用者の側からもきわめて多様な要求が寄せられている。収書や貸出の方法、館内の照明・温度・騒音、開館時間の問題など、枚挙に暇がないと言ってもよい。そのうちには図書館だけで対応することが不可能なものも多く含まれている。しかし、研究遂行上不可欠と思われるものに対しては、できるかぎり実現の方向に向かって努力したい、と私は考えている。もとより個人の希望が一般にとって有害であり、多数者の研究を阻害することもありうる。事の採否の判断は十分慎重でなければならぬとしても、研究の障害となることは図書館の存在理由の否定につながる。個人的なわがままでなければ、われわれはそれを実現する心構えをもつべきであろう。

近い将来において、塾図書館が真剣にとり組まなければならない重要な課題はコンピューターの導入によるサービス業務の効率化であると思われる。情報量の増大に伴う機械化の必要性は、現段階ではもはや無視することができない。塾ではすでに図書予算の管理の面で早くから機械化がなされている。また、日吉でも今年度から貸出業務が機械化されている。このような試みをより組織的にし、図書館業務全般に及ぼすことは目下の急務であると思われる。とくに、機械処理を加味することによって、図書の整理や貸出に要する時間を短縮し、情報検索の便宜を増すことは、われわれの真剣にとりあげねばならぬ主題であると思う。

私自身は、専門とする研究分野の関係上、機械化に対する過度の幻想をもちあわせていないつもりである。何が機械的に行われぬかというのは、1930年代の論理学の重要課題であった。しかし、同時に機械化に対する恐怖ももちあわせてい

ない。生身の人間でなければできないことがある以上、機械に任せられるものは機械に任せて、人間本来の仕事にいそむべきだというのが、私の考え方である。

ところで、現実に機械化を行うという仕事は、しばしば機械の水準に人間を近づけることになり勝ちである。最近よく耳にする第5世代のコンピューターは機械の人間化を目指すものと言えるであろうが、現在のコンピューターはまだ人間離れしている。そのため、機械処理がかえって事を繁雑にする面もあることは否定できない。だが、大量に発生する同種のジョブを処理する場合の有効性については、もはや、議論の余地がないであろう。機械を利用することによって、業務に要する時間を短縮し、人間の力をより集中的に使用することによって、提供するサービスの質をたかめることこそ図書館における機械化の本来の目的であると思う。塾における図書館業務の機械化は、あくまでも、多様な情報源と利用者の多様なニーズに即応する態勢をとることを目的とするものでなければならぬであろう。

機械化のもつ利点のひとつとして、われわれがほとんど無意識的に行っている作業行程を分析し、それを新たにとらえ直すことによって新しい見通しを可能にすることがあげられよう。われわれが慣習的に採用してきた方法がはたして最善であるのかどうか、反省する機会をそれは与えてくれる。われわれは、現在、<情報の氾濫>という言葉が現実に意味をもちうるような大きな転換期にさしかかっている。このようなときに、新図書館が完成したのである。新しい酒袋に新しい酒を盛るためには、旧来の慣習になずむことなく、虚心にシステム全体を見直し、真に図書館業務として最善のものを志向する態度が要求される。私は機械化の課題を中心に据えながら、思いこみに囚われない開かれた柔軟なサービスを、情報センターの職員の方々とともに、心がけてゆきたいと思う。

日吉新図書館への期待

日吉情報センター

衛 藤 駿

(理工学部教授)



日吉情報センター所長に就任してはやくも半年が経過しようとしている。その

間、塾の創立125年記念事業のひとつである日吉新図書館の建設計画が次第に具体化して、すでに建設調査委員会に小委員会が設置され、実現へ向っての作業が進行しつつある。

新図書館の構想については『三田評論』5月号(第825号)においてその経緯と概要、その時点での抱負の一端を記したので、大筋はすでにご承知のことと思うが、繰返し要約すればつぎのようなものである。

昨年来の日吉新図書館建設調査委員会の了承事項によれば、まず新図書館が外観・機能の両面で、日吉キャンパスにおける研究・教育の在り方を象徴する新しい顔たりうることを前提に、つぎのような構想がもりこまれたのであった。

(1)に、学習図書館機能を基本とするが、教職員の研究施設としても十分役立ちうるものとする。(2)に、学生閲覧座席数は日吉在籍者数の約15%、1,500席程度とするが、大型複数資料の同時利用や、グループ研究についても配慮したい。蔵書数は向こう20年間、40万冊をメドとする。(3)に、建設地は、教室・研究室との関係から、現事務棟あんとすること、の3点である。したがって現事務棟施設が併設されることになるが、このことによって図書館としての機能が損われぬことも確認されたのであった。

ここで学習図書館という呼称についてつけ加えておきたい。これは文部省の図書館についての種分けによると、図書館は機能別に、(1)総合図書

館、(2)研究図書館、(3)保存図書館、(4)学習図書館の4つに分類されている。これでいくと日吉新図書館は、(4)の学習図書館に該当するという意味である。

今春開館した三田の新図書館が独立棟であるのに対して、日吉では学習図書館に事務棟、加えて教員の研究機能も一部併合されることになるのである。三田が、人文・社会系の各専門分野における学問的水準を示しつつ、教員、大学院生、学部卒論、ゼミといった研究・教育に対応しているのに対して、日吉のそれには、医・理工をふくめた1・2年生が、もっぱら基礎的知識と教養を培うための目的があり、三田と日吉では設備、機能、内容などに若干の相異が生ずることは当然だろう。

以上が日吉図書館建設計画の概要であるが、本塾では以前から、図書館は情報センターという組織に組み込まれている。図書館という名称のもつ意味は、図書というものが持ち続ける文化的意義とともに変わることはないだろうが、情報検索のソースは、近い将来いわゆる図書というかたちから急速に離脱していくことが予測されている。情報媒体には、テープ、マイクロフィルム、ビデオ、ファクシミリはもとより、ビデオディスク、多重映像TV、キャプテンシステムといった多様化が予想される以上、情報センターとしては、これらにも対応せざるをえなくなるのではないかと。現時点でも、利用者自身に高度の情報検索能力が要求されていることはもちろんだが、これからは、当然ライブラリアンをはじめとする専門スタッフの充実が、いっそう求められ、評価されてく

ることだろう。

今日、写真や映像（フィルム、ビデオ、ビデオディスク等）に代表される「複製文化」は、多くの人々にひろく親しまれ、利用されているが、それらは膨大な量と高度の質に支えられ、次第に芸術性を獲得しながら、まさに現代における社会生活や文化状況を特色づける新たな領域を形成しつつある。

このことから、本塾をふくめた大学における情報センターの、将来における社会的、文化的存在価値を展望するとき、古典的資料とともに現代社会、大衆化社会を支えているあらゆるメディア媒体の積極的蒐集と活用をはなれて考えることは不可能ではないか。

日本の文化は、古来民衆に根をおろした文化の中にこそその特質を育ててきた。そして現代の日本社会は、いまや米国とならんで、最も進んだ大衆化社会といえることができるだろう。こうした視点からとらえるならば、現代の日本文化、とりわけ大衆文化の中で主要な領域を占める「複製文化」は、将来の日本文化を文明たらしめるために、きわめて重要な役割を果たしつつあるものといわざるをえない。

ところで『福翁自伝』によれば、三たび外遊の機会をえて渡米した福沢は、政府から支給された手当金で「あらんかぎりの原書」を買い「塾生めいめいにその版本を持たしてりっぱに修業のできるようにしたのは、実に無上の便利でした」とある。

そして福沢は、自からの思想を回顧した中で、その方向を二段に分け「掃除破壊と建置経営」という一文にまとめている。解釈はとにかく、日吉新図書館建設に際して限られた敷地と予算内において心すべきは、旧制度、旧思想を思いきって排（掃除破壊）し、塾のあるべき明日への展望をふまえて、建築場所と規模（建置）が決ったならば、

あとはソフトウェア（経営）で勝負すべきではないか。

もちろん今日における情報環境は、福沢の時代とは質・量的に相異しているが、精神においてはさほどかわりないのではないか。新図書館の在り方については「あらん限りの情報」が提供でき「塾生めいめいの、活きた勉学の場」とすることが、これに当るだろう。いわばワーキング・ライブラリーとしての図書館機能を活性化すること、視聴覚学習機能をふくめたソフトウェアの向上の二点が相当するのではなからうか。

結論としては、新図書館にワーキング・ライブラリーとしての機能を十分に発揮しうよう衆知をあつめたいと思っている。幸い旧藤山図書館の一部を保存図書館として使用することが決っているので、新・旧図書館への蔵書の配分を合理的に行うことによって新図書館機能を活性化し、旧図書館を蓄積資料検索の場とするといった機能別のふり分けについても今から検討準備に入りたいと考えている。

なお新図書館の設計には三田を手がけられた楨文彦氏とスタッフが当られるので、図書館としての設備や機能についてはかなりのデータが揃っている筈である。これからは三田の新図書館で生ずる使用上の問題点もチェック是正できるから、禍を転じて福となすこともできるだろう。

事務棟との接合については技術的には問題ないが、相方の管理・運営上の利点を生かすべく処理したい。教職員の研究施設としての新図書館のあり方については、研究室運営会議でも検討される筈であるが、塾生の学習図書と研究用図書を分離する理由は、便宜上はとにかく、質的にはないのではないかと考えている。大方のご意見、アイデアを、期待をこめて新図書館にお寄せいただきたい。

医学情報センター所長に就任して

医学情報センター

嶋 井 和 世

(医学部教授)



医学情報センター所長の仕事を昨年10月からお引受けすることになった。

昭和50年4月から9月まで、半年の間、同じ情報センター長の職にあったが、医学部長の職に転じたので、結局、いま当時の残りの1年6ヶ月を果さなければならないはめになった勘定である。前回の半年の経験はそろそろ図書館の情報システムやその活動振りが判りかかってきた程度であった。したがって、今日はあらためてはじめて情報センターの勉強のやり直しをしなければならぬまいと覚悟している。数年の歳月は情報システムの内容を大きく変化させているに違いないと考えている。

医学の研究、教育にたずさわる側にとっては、今日のようにぼう大な情報量を如何に処理してゆくか、まことに、研究、教育の内容を左右する大きな問題である。その処理の仕方によっては仕事の開発、進展に著しい差異をもたらすことは確かである。しかも、現在の医学の研究、教育が求める情報の内容は単に医学の領域にとどまらず、自然科学の範囲を越えて、社会科学、人文科学の情報が含まれることも不可欠の条件となってきた。それらの凡てを満す情報システムは理論的にはあり得ても現実には不可能な機構であろう。

そのような事を考えてみると、現在の医学情報センターの医学領域で占める役割はその機構のうえからも、機能上の点からも途方もなく大きな将来性を含んでいると考えるのである。医学情報センターが医学領域以外の広範囲の分野までカバーする必要は勿論あり得ないが、研究、教育に関わ

る情報センターの特質は医学を中心にその連携の重要性をより深く認識することにあると考える。

慶應大学が三田を中心として各学部の情報網を研究、教育情報センターとして一列の中に統合してきた先見の明は今後の学問の進展のうえに多大の貢献をもたらすことは確実なことであろう。

医学情報センターとしては、申すまでもなく医学中心の情報処理をますます機能化してゆく努力がなされるわけであるが、学際的な情報システムの一環としての機能的役割を有機的にすすめてゆくことも同時に科された仕事であろうと思う。現実には、慶應大学医学情報センターが医学の領域において機能的な情報処理についての最も高い評価をわが国で受けていることは周知の事柄であるが、単なる医学部図書館というイメージではなく、広域の医学情報センターとしての時代感覚を駆使している処にその評価が生れるのであろう。幸にして、この評価を与えてゆく優秀な多数のスタッフを医学情報センターが容れていることは、大変有難いことであるが、同時に、医学情報センターに関わる三田の研究、教育情報センターの寄せられた深い理解が今日をあらしめたことも忘れるわけにはゆかない。

私はこの3月、日本医学図書館協会会長の山本俊一教授(当時、東京大学医学部図書館長)から4月以降、同協会の会長代行を依頼された。山本教授が4月以降、東大医学図書館長の職を辞任される理由からであった。私としては、馴れぬ医学情報センター長の仕事もあり、当初、ためらいを感じたが、間もなく、その止むを得ない事情も理解できたのでお引受けする結果となった。わが医

学情報センターの機能的なバックグラウンドが見込まれたことは明らかである。医学情報センターの運營業務にも通曉していない私にとって、それ以上、日本医学図書館協会の責任者としての仕事は二重の負担でしかないうえ、当然、医学情報センターの職員への負担も重くなることは必定と考え、ためらう理由は十分あると思ったが、結果としては引受けざるを得ないハメになった。全国の図書館関係の中で占める医学図書館の位置づけはどのように定義されているのか、現実、どうなのか、まだ理解しているわけではないが、古い歴史的背景をもつこの日本医学図書館協会にしても、情報過剰ともいべき現代の情報多動化の中で、他の学問領域と情報交流にしても、無縁ではあり得ない。日本医学図書館協会が今後、どのような視点で医学情報活動をとらえてゆこうとするのか、医学情報センターとしても関心のある処である。

来る1985年には日本医学図書館協会が第5回国

際医学図書館員会議を東京で主催することになった。すでに組織委員会も発足し、各種委員会は具体的に企画を進めつつある現状である。日本医学図書館協会、つまりその会員である各大学医学部図書館にとっては国際的なレベルにおいて、日本の情報処理の機構やその能力に対する認識をあらたにする機会であるとともに、国際的な医学情報を中心とした情報活動の現状を把握できる絶好の機会が得られるという点で、その意義は大きいと思う。組織委員会の本部は国際医学情報センターの好意でその一室が当てられ、同情報センタースタッフの協力も得られることになっているが、今後の国際会議開催へむけての活動のあらゆる面で、医学情報センターの職員にも負担がかかることは否めない。職員各位のご理解を願うと同時に広く、三田情報センターのご理解、ご支援をも得て、同国際会議開催への順調な歩みを進めたいと願っている。

大江所長 国公立大学図書館協力 委員会委員長に就任

大江晃研究・教育情報センター所長は、昭和57年8月より、国公立大学図書館協力委員会の委員長に就任した。任期は明年7月末日までである。

同委員会は、学術研究資料および情報の相互利用を目的に昭和54年11月に設置された。大学図書館の資料の相互利用、とくに文献複写、図書館資料の交換、電算機による学術情報、書誌情報ネットワーク、職員の研究、交流などが大学図書館サービスの重要な課題であり、今後ますますその重要性が高まっている。その意味で大江所長の役割と、それを補佐する情報センタースタッフの責任は重大である。

嶋井所長 日本医学図書館協会会長に就任

嶋井医学情報センター所長は、本年10月29日に開かれた第53回日本医学図書館協会総会（当番校 関西医科大学）において同協会の会長に選任された。（任期は2年間）

同協会は、昭和2年に発足以来我が国の医学分野における唯一の組織的な図書館協力活動の推進母体であり、現在の参加会員は国公立大学の医学図書館を中心として99機関である。その主な活動目的は、①参加図書館相互の業務協力、②医学図書館の管理・運用・技術に関する研究と教育、③内外の関係機関との提携と国際会議などへの参加。

特に国際活動については、同協会の主催により「第5回国際医学図書館員会議」（東京、1985年9月30日—10月4日）の開催が予定されている。

そのため嶋井所長は、併せて同国際会議日本組織委員会委員長にも就任されている。

所長・館長13年を顧みて

前三田情報センター所長

高鳥 正夫

(法学部教授)



情報センター所長と図書館長であった13年を振り返ってみると、いろいろの出来

事がすべて昨日までの1週間のなかで起ったような気もするが、また、実際に使用した何冊かのメモ帳をつみ重ねてみると、随分長い間であったという実感も迫ってくる。この13年の間、所長の仕事を続けるについては佐藤朔、久野洋、石川忠雄の各塾長をはじめ、数え切れないぐらい多くの教員や職員の皆様のお世話になったし、特にいちばん身近かで長い間所長の仕事を助けてくれた図書館、情報センターの皆さんに深く感謝している。

この13年間の仕事を大きく二つに分けると、前半は研究・教育情報センターという新しい組織を円滑に発足させ、これを塾の内外で定着させることであったし、後半は三田に新しい図書館を建設することだったと思う。昭和44年6月に私が図書館長に就任したときには、情報センターの発足は実現すべき課題として負わされていたが、新図書館の建設問題は具体的には浮んでいなかった。従来の図書館、研究室書庫棟を一体として管理し運営する情報センター構想は、私の前任の図書館長佐藤朔がとりまとめ、多くの困難を乗り越えて実現の一手手前のところまできていた。ところが、大学紛争の最も激しかった昭和44年の4月に永沢邦男塾長の任期が満了し、塾の規程に基づいて行われた選挙によって佐藤は次の塾長候補者に選ばれ、やがて塾長に就任することとなった。

その頃、研究室の運営委員長を勤めていた私は、図書館長であった佐藤と何回かの会合をもったし、ある時は、研究室側から見ると、図書館の

本の買い方が経済や文学関係に片寄っているように思えるが、法学や政治学関係の本や資料も収集して、研究者や学生の要望に応えるようにと申入れたこともあった。私は佐藤が著名な仏文学者であり、学内でも文学部長や常任理事を歴任したということは承知していたが、それ以上には、その人柄や学問を詳しくは知らなかった。また、当時、佐藤の指導力によって路線がひかれていた研究・教育情報センター構想についても、研究者や研究室が中心的な役割を担当すべきであるのに、図書館や文学部の図書館・情報学科の関係者が中心となって準備しているのは、おかしいのではないかという気持もっていた。

佐藤塾長のもとに新理事が決まったという噂を耳にした6月の初めに、それまで常任理事として永沢塾長を補佐してきた石川忠雄から、新塾長の意向だが、空席となった図書館長をやってみないかという話があった。その折、ただ図書館長になっても、進行中の情報センター計画をつぶしては困るという特別の注文がつけられた。この注文が企画担当の常任理事を経験した石川からの注文なのか、それとも、佐藤の意向が伝えられたものかは当時は分らなかった。昨年、佐藤が新築された金沢工業大学図書館をめぐる対談のなかで、塾の研究・教育情報センターのこともふれ、慶應では高鳥館長も初めは研究者であって新しい図書館を理解していなかったが、後には良く情報センター構想の実現に努力してくれたと話しているところから見ると、佐藤も一面では不安をもっていたようである。そのため、図書館長となり情報センターの準備本部長を兼ねた私の言動には、佐藤が

選び一緒に仕事をしてきた情報センター準備本部のスタッフは、気が気でなかったのではないかと思う。

「慶應義塾図書館史」を執筆した伊東弥之助によると、この新しい研究・教育情報センター計画をまとめると共に、これを学内の役職者などに説明し理解をうるについては、労を惜しまない佐藤の三面六臂の活躍があったという。当時の副館長であり、引続いて私をも助けてくれた石川博道や伊東も、情報センター構想の性急な具体化には懐疑的な気持ちを隠さなかったが、それでも佐藤の誠実な人柄については、当時も今も敬愛の念を惜しんではいない。私の当面の仕事は、こうして役職者の間では諒解がえられた情報センター計画を、ほぼ1年の間に規程の案文にとりまとめ、学内諸機関の議を経て実現することであった。そこで各学部や他地区の会合に出席して情報センター計画の説明を行ってみると、医学部や工学部の場合には、図書館の活動が既に情報センター計画の線にそって行われていたこともあって、その内容は理解され易いようであったが、三田と日吉の場合には、種々の事情から私共の説得も壁にぶつかることが少なくなかった。たとえば三田では、図書館と研究室とが深い関係なしに収書を行い整理を進めてきたこともあって、情報センター計画にはもっともな点もあるが、簡単には納得できないという空気が強かった。また、当時は大学紛争のさなかで、学校当局の行うことに対しては常に批判的という空気も見られたが、そんなことも影響したのかも知れない。特に三田や日吉では、図書館という名称がなくなって、研究・教育情報センターというあいまいな名称になることには反対が強く、法学部の手塚豊や斯道文庫の阿部隆一が強硬な反対意見を伝える反面、文学部図書館・情報学科の沢本孝夫は名称を変えたり、構想を変更しては困るという強い申入をもって現われた。また、図書館の職員と研究室や情報センター準備本部の職員の間にも、事務の進め方に端を発する感情的な対立があり、それがまた教員の方にも影響するということがあった。

こうした両者の不信感を完全に解消することは

不可能に近かったが、情報センター計画を規程の形にするためには、どうしてもどこかに明確な線をひかなければならない。そのため何回かの会合を開き、対立する意見をきき疑問や不安の点を述べさせた後に、私は解決のための試案の骨組みをメモして、会合の席に提出することとした。それは図書館業務のうち、収書、整理、運用の機能はこの際一元化をはかるが、選書は研究者と図書館員がそれぞれ行い、その連絡を強化するために合同委員会を設ける。研究室の図書部門の管理は学部から委託を受けて新しい情報センターが担当する。図書館は施設名のほか、館長、副館長その他の職員をもつ組織としても存続させるというものであった。こうした考え方の背後には、研究・教育情報センターという名称と組織のもとに、従来ばらばらであった研究室と図書館をまとめていくことは必要であるが、外部から見ると、その名称からは内容を理解し難いという難点がある。そこで、各大学は今後もこの名称は模倣しないで、図書館という組織を残しながら改革を進めていくであろうという見通しがあった。

前述した「慶應義塾図書館史」によると、昭和44年8月の情報センター準備本部会において、高鳥館長は図書館の名称を図書収集の機能面で残し、図書館蔵書の特徴を今後も生かすため、図書館員の選書スタッフを活用すると発言した。こうした図書館の名称を残すということで、不満を内に秘めた図書館員の心は和ぎ、情報センター準備委員会の賛成をえて新構想は実現されたとある。情報センター構想における研究者の側の発言力の強化を考えて準備本部長をも兼務した私が、情報センターの発足間近かの段階で、図書館の組織と機能の存続のために努力したことは、一部のスタッフには分り難い態度であったかも知れない。けれども、義塾の研究・教育を支援する図書館業務のあり方を見通した場合、図書館だけを情報センターに改組して研究室図書はそっとしておくというのでは、将来の改革をますます困難なものにしてしまうと考えたためであり、ここに現在の情報センター組織の基本的な骨組みが定まったのである。

図書館長、情報センター所長としての13年間の活動は、こうした思いがけないところから始まったものである。そのため、この情報センター計画も佐藤がこれを具体化した場合を、私が具体化した今日の姿との間にはあるいは差異があったかも知れない。また、図書館学の研究者や図書館実務に明るい方から眺めると、私の仕事ぶりは危なかくて心配だったことも少なくなかったであろうが、今となってはお許しを願うのみである。13年間の主な出来事は情報センター機関誌「KULIC」13号にも書いてきたが、ここに機会を与えられたので、私自身の眼から見た館長就任の経緯と当時の様子を書き留めておくこととした。

最後に、高村象平、前原光雄、佐藤朔の歴代の

図書館長が、いつも塾の図書館と情報センターに深い愛情をもちながら、じっと静かに見守っていて下さる態度が、私の仕事を進めていく上で大きなささえとなったことも忘れることができない。高価なコレクションの購入、図書館ステンドグラスの復元、新図書館の建設などの問題についても、ご相談するといつも知恵を出して下さったり、側面から支援して下さいたことに感謝している。私も各大学や図書館から注目されている三田の新図書館と、情報センター全体の運営を引受けてくれた大江晃所長に期待しながら、13年を過ぎた図書館にいつも協力していきたいと思っている。

新 図 書 館 と 見 学

新図書館が開館してはや7ヶ月。三田情報センター総務課に対する見学問い合わせは一向に減る気配も無い。開館のあわただしさも落ち着いた5月下旬から見学を受け付けているが、新聞・テレビ・雑誌などで紹介された事もあって、学外からの見学希望は非常に多い。10月末までに新館を見学した団体は196団体1,920名である。内訳は表1の通りである。見学者は主に図書館関係者であるが、大学図書館ばかりでなく、学校図書館・専門図書館・公共図書館からの見学希望も多い外国からの来訪者も多く、これまでに中国、イラク、スウェーデン、英国、西ドイツ、アメリカなどから15団体35名が新館を見学している。

見学の申し込みは三田情報センター総務課（電話 03-453-4511 内線 2513）で受け付けている。見学所要時間は、新館を一通りご案内して説明するだけで約1時間半。質問の多い時には2時間を超える事もしばしばである。見学案内には三田情報センタースタッフが交代で当

たっているが、あまり見学が増えると業務に差し障りも起こる上、利用者にとっても迷惑となるので、見学は平日の午前中に1日1組を原則として受け付けている。こうした事情なので見学を希望する場合はなるべく早目に総務課へご連絡下さるようお願いしたい。

表1 新館見学者数（昭和57年4月～10月）

団体種別	団体数	見学者数 (人)
塾内	11	354
大学図書館	79	316
公共図書館	6	16
専門図書館	11	101
学校図書館	5	54
図書館関係団体	18	426
その他	66	653
計	196	1,920

「スタンフォードにて」

安田 博

アメリカ、カナダの大学図書館を、図書館のコンピュータ化を中心として、約5か月の予定で見て回る機会を与えていただき、7月初旬に日本を出発してから、早くも2か月が過ぎました。これまでの2か月の大部分はスタンフォード大学での語学研修に費やされ、あとは、スタンフォード大学の図書館とRLG (Research Libraries Group の略、アメリカの大学図書館のネットワーク) の調査で終わりました。

スタンフォード大学は、サンフランシスコから車で南へ約30分走ったところにあり、広大なキャンパスを持った総合大学で、キャンパスの中には、研究施設の他にゴルフ場、テニスコート、プールなどがあり、寮も独身用、妻帯者用と豊富に用意されており、慶應の狭いキャンパスに慣れた者には信じられない環境の中にあります。

スタンフォード大学の英語のサマー・コースは、これからアメリカの大学院へ入る人達のためのもので、このコースで語学研修を受けた人達の半分はスタンフォードに残り、あとの半分の人達は全米各地の大学へと散って行きます。世界中から人が集っていますが、やはり一番多いのは日本人でした。授業は、週5日、1日5時間で、会話、聞き取り、レポートの書き方、読み方、ノートの取り方、ディスカッションとバラエティーにとんでおり、毎日、宿題がたくさん出るのでなかなかハードなスケジュールでした。

スタンフォード大学の図書館は、蔵書数では全米で第5位にランクされ、12の University Libraries と6の Cordinate Libraries によって構成されています。University Libraries は Green Library をメインの図書館として、残りの11がブランチの図書館となっていますが、Cordinate Libraries は、医学、法律などの独立した専門図書館の色彩の強い図書館によって構成されています。

Green Library は、人文・社会科学の分野の大学院学生以上の研究者を対象とした図書館で、蔵書数は約160万冊、座席数は1,000席以上で、旧館が1910

年代に建てられ、1980年に新館が増築されました。建物は、地上3階、地下1階で、三田の新館よりは、スペース的には、ゆったりとしています。グループ学習室、セミナー・ルーム、キュービクル、ラウンジなど機能的には、ほとんど変わりはありませんし、サービスもそれほど変わりはありませんでした。しかし、こちらの図書館が優れているのは、コンピュータを利用した、収書、整理などのテクニカルな部分とネットワークです。スタンフォード大学では、UC のパークレーと密接な関係を持ち、毎日、何便かのグーテンベルグ・エクスプレスというバスを運行して、お互いの図書館の利用を計っています。

RLG は、コンピュータを利用したネットワーク・システムを提供しており、スタンフォード大学で開発された BALOTTS と呼ばれる収書・整理システムを拡張した RLIN システムが使われています。RLG には、エール大、コロンビア大、プリンストン大、コーネル大、UC パークレーなどの20以上の大学図書館が加盟し、現在は、RLIN-II というグレード・アップしたシステムを、日立のスパイ事件で有名になった IBM 3081 を使用して提供しています。また、中国語、日本語、韓国語を一度に扱えるシステムを開発しており、CJK プロジェクトと呼ばれており、CJK 専用の端末が近々出来上がり、1983年春から、CJK のシステムを提供する予定だそうです。

アメリカでは、図書館の運営やネットワーク・システムの開発、運営に、日本では考えられないくらいの人手とお金をかけていますが、現在のリーガン政権のもとでの、引き締め策と不況によって、どこでも、お金を集めるのに苦労しています。新しいシステムの開発も、以前よりはずっとスピード・ダウンを余儀なくされており、大学関係者の間でのリーガンの評判はあまり芳しくありません。カリフォルニアは、北と南にわけることができ、北は良いけれども、南はそれほど良くなく、リーガンは南の間人であるとまで言う人がいます。

これから、あと3か月、アメリカ各地を回りますが、誰に聞いても、このスタンフォードぐらい、気候が良くて住みやすい所はないと言うし、確かに良いので、これから、ここを立つのが残念でたまりません。(三田情報センター選書課係主任)

新館開館準備とPR

武井恵子

(三田情報センター総務課)



1. はじめに

三田情報センター総務課では、昨年6月から慶應義塾図書館・新館開館に向けて具体的な準備作業を開始した。資料再配置計画・移転計画・旧図書館改修工事計画の立案、家具備品類の選定・発注、及び利用案内・サイン計画によるPRなどの業務は、情報センター全体に関わり内外との緻密な連絡調整を必要とする為、総務課が担当する事となった。開館準備にあたって考慮しなければならない前提条件は次の様なものであった。

案，家具備品類の選定・発注，及び利用案内・サイン計画によるPRなどの業務は，情報センター全体に関わり内外との緻密な連絡調整を必要とする為，総務課が担当する事となった。開館準備にあたって考慮しなければならない前提条件は次の様なものであった。

- 1) 新図書館は昭和57年4月初旬に開館する。
- 2) 旧図書館は一部資料を配置したまま昭和57年3月から11月にかけて改修工事を行い，終了後は書庫部分の大半を再び図書館として利用する。
- 3) 旧図書館及び研究室書庫棟などの改修工事の一部は予算の関係上昭和57年3月末までに行う必要がある。
- 4) 移転に際して利用者になるべく不自由をかけない。

2. 資料再配置計画について

資料再配置計画は，三田情報センター協議会に設けられた新図書館のソフトウェアを検討する特別委員会において早くから協議が続けられ，昨年6月には次の様にまとめられていた。

＜新図書館へ配置する資料＞

- ・新分類の和・洋の単行書
- ・参考図書
- ・貴重書・和装本

- ・雑誌
- ・図書館・情報学科の資料
- ・文学部単行書
- ・法学部単行書

＜旧図書館に配置する資料＞

- ・経済学部・商学部単行書
- ・旧分類図書
- ・個人文庫
- ・議会資料

総務課ではこの再配置計画をもとにどの資料をどのフロアに割り当てるかを検討し，具体的な資料再配置計画を立案した。再配置にあたっては，同一主題の資料は近接した書庫にまとめる，利用の多い資料はアプローチしやすい位置に置くといった点に留意した。また，旧館第1・第2書庫の木製書架をスチール書架に取り替える工事の為，旧館に残す資料も一時的に第3書庫などへ仮移転する必要があり，工事終了後旧館に展開しやすい様に仮移転計画と資料再配置計画を関連づけて考えなければならなかった。

再配置計画の基礎的なデータ収集の為，書架調査を行い，各フロアの書架・棚板の数量，配置されている資料の現状について調べた。これを基に計画をたて，現場のスタッフをまじえた協議の結果最終的に図Iの様な再配置計画を特別委員会に提出し了承された。

移転時及び移転後各部署で細部について修正が加えられた為，現状の資料配置は多少異っている。また旧館の図書再配置は閲覧課によって再検討され，大幅に変更される予定である。

3. 旧館改修工事計画

旧館施設の内，研究施設利用委員会によって三田情報センターに配分された部分は，次の通りである。

- ・第1書庫B1F～屋根裏(1F南書庫を除く)
- ・第2書庫B1F～3F
- ・第3書庫B2F～3F

これらの部分を有効に利用する為次の様な改修

慶應義塾図書館（新館）の開館

図 I

新館図書配置計画

フロア名	資料名	
7F	機械室	
6F	事務室	
5F	貴重書・図書館・情報学資料	
4F	総合資料室 (経商資料室資料 法学部資料室資料 1960年以降)	
3F	雑誌室 (雑誌室・文学部資料室資料 和雑誌1960年以降 洋雑誌1970年以降)	
2F	教養図書コレクション	
1F	レファレンス・ブック 目録	
B1F	新分類図書(A000-399) レファレンス・ブック・コーナー	
B2F	新分類図書(A400-999, B000-999, LA, LB)	
B3F	文学部図書・法学部図書	
B4F	西書庫	特殊書庫
	雑誌室・総合資料室資料, 他	特殊資料和装本
B5F	雑誌室・総合資料室資料	和装本未整理

現図書館図書再配置計画

フロア名	第1書庫		第2書庫	
	南	北		
屋根裏	予備書庫		第3書庫	
4F	(中国文学)	学位論文	斯道文庫	斯道文庫
3F	藤山コレクション	アラビア語コレクション	旧分類図書 旧分類図書	J P レファレンス・ブック
2F	旧分類図書 Q	旧分類図書 R	旧分類図書 E	経済学部図書 商学部図書
1F	塾史資料室	金庫室	旧分類図書 旧分類図書	M S
B1F	燻蒸室	倉庫	旧分類図書 旧分類図書 図書館情報学資料(DC分類)	旧分類図書 B 旧分類図書 G 旧分類図書 H 旧分類図書 L 旧分類図書 W 旧分類図書 X 旧分類図書 X B
B2F				議会資料 個人文庫
フロア名	研究室書庫棟			
B2F	学会誌その他(保存書庫)			

工事を行う事を計画した。

- 1) 旧斯道文庫入口を利用して新しい出入口を設ける。
- 2) 第3書庫3階をサービス・フロアとし、カウンター、閲覧席を設け、空調設備工事を行う。
- 3) 第3書庫1階・2階に小閲覧室を設け、空

調設備工事を行う。

- 4) 第3書庫内部に地下2階から3階に通じる階段を新たに取付ける。
 - 5) 第1・第2書庫の木製書架をスチール書架に取り替える。
- 改修工事は新館への移転作業終了後開始された。情報センター使用部分については本年9月30

日に工事を終了し、10月1日から資料の移転を行い、11月1日から改めて図書館として利用できる予定である。

4. 移転計画の立案と実施

移転計画は旧館及び研究室書庫棟から資料・備品類を新館へ移転し、改修工事の為に一時的に旧館・研究室書庫棟の一部に資料を仮移転する第1次移転と、改修工事後仮移転資料を旧館へ展開する第2次移転が相互に関連づけて計画された。具体的には次の様にして移転準備と実施が行われた。

① 移転準備連絡会の組織

移転準備の第1歩として、まず各部署から1名連絡担当者を集め移転準備連絡会を組織した。ここでは移転に関する新しい情報を提供し、現場の移転準備を促進すると共に、新館のソフトウェアについて活発な討議を行った。

② 書架・備品調査

移転を計画するにあたって、まず資料及び家具備品のすべてについて、それぞれどこへ移動するかははっきり分ける必要があり、書架調査及び備品調査を移転準備連絡会担当者の協力を得て実施した。

③ 新調家具・備品類の選定・発注

閲覧関係の家具は新調する事となり、その多くをオリジナルデザインで製作した。建築に調和し図書館の機能を満たす家具にする為、図書館員の意見がデザインに反映される様努力した。事務関係の家具・備品は原則としてそれまで使用していた物を新館でも利用する計画であったが、新規に購入する物については55年度中に選定し、56年度予算で購入した。これらの新調家具備品は一次移転の前後に業者によって新館へ納品するよう手配した。

また多くの閲覧家具備品が新館では不要となった為、塾内各部署に呼びかけて再配分し、残った物は管財部へ移管または廃棄を依頼した。

④ 運送業者の選定

10月初旬に運送業者2社を呼び、移転時期・方法等について説明し、書架・備品に関する資料を渡して見積書の提出を依頼した。実際の業者の選定は塾監局管財部で行われ、11月下旬になって東京通運が請け負う事が決定した。

⑤ 資料・備品の梱包・輸送方法

東京通運と協議の結果資料・備品の梱包輸送は次の様な手段をとる事とした。

〔資料〕

- 1) 予め用意した資料配置マップに基づき、情報センタースタッフがフロア別に色分けされたステッカーに新配架先のブロック・列・連・段・左右を記入し、棚上の資料にはさんでおく。
- 2) 一棚を左右二つに分け、一棚の1/2を巻ダンボール紙で巻き結束梱包してはさんであったステッカーを外側に貼る。
- 3) 2)を台車に積込んで搬出し、トラックに積んで新館へ運ぶ。
- 4) パワーゲートを使って台車を床におろし、新配架先まで移送し、所定の棚段に配架する。
- 5) 配架された資料を情報センター職員立会の上、誤配がないかチェックし、結束テープを切りダンボールを取り除く。

ただし雑誌は新館移転後大幅な編成替えを行う予定であったので、一棚を二つに分けるとは限らず小分けして輪ゴムなどで結束した。また貴重書と装本はダンボールに詰めるかエアークラップで梱包した。

〔備品類〕

備品類は内容物をダンボールに詰め、備品・ダンボールのそれぞれに備品用ステッカーを貼る。目録ケースは引出を抜き出して4～5個ごとにダンボールを巻いて梱包する。ステッカーの指示に従って配置先へ運び、情報センター職員の指示によって配置する。

⑥ 第1次移転スケジュールの作成

移転スケジュールの作成にあたって次の点に留

意する必要があった。

- 1) 情報センター移転後の施設利用計画の為の日程
 - 2) 56年度学年末試験期間まで平常通り開館する。
 - 3) 新館の書架・閲覧家具の搬入据付工事日程
 - 4) 入試期間中は構内輸送をなるべく避ける。
 - 5) 移転後約1ヶ月の整備期間が必要である。
- 以上の点をふまえ、一日の移転作業容量とあわせて検討し、次のような日程で移転する事が決定した。

1月20日	移転準備作業開始
2月3日	旧館閉館
2月8日	移転開始
2月19日～22日	仮移転作業
2月23日	研究室棟改修工事開始
3月1日～	雑誌編成替え作業
3月9日	移転終了
3月10日～4月6日	館内整備
4月8日	開館

⑦ 移転に関する準備作業

各部署で予め移転に備えて新配置先の書架へ具体的に資料を割り付けるマップ作成作業が、昨年から進められた。これを基に1月20日から具体的な準備作業に入り、a. 移転先をステッカーに記入して資料にはさむ、b. 書架の棚間隔を調整しアドレスをつける、c. 不要資料の廃棄などの作業を行った。準備作業は、学年末試験期で忙しいパブリック・サービス部に代わって、テクニカル・サービス部職員が本来の業務を停止して作業にあたった。旧館閉館後は移転日程に合わせて忙しい所を他部署から応援するという形で助け合い、次々に準備が進められた。

⑧ 第一次移転の実施

第一次移転は2月8日所長室・本部・整理課・総務課の事務室移転から開始し、3月9日三田文学ライブラリーの移転をもって終了した。実際の移転作業は東京通運が行ったが搬出側と搬入側の

それぞれに情報センター職員が立ち会った。移転準備作業、移転ともにプラン通りに進まない事も多く、移転の状況を連絡するため、「引越通信」を発行し、配布した。

移転の終了した部分から開館に向けて館内整備作業に入った。特に雑誌資料の編成替え作業には、情報センタースタッフの他、逗葉ヨットクラブの学生アルバイト20人を動員し、作業にあたった。また3月下旬には医学情報センターから2名の応援をうけ、館内整備作業を手伝っていただいた。館内整備は予想よりも時間がかかり、4月7日の開館式にぎりぎり間に合わせた部署が多かった。

移転準備、移転の実施には情報センター職員が総力を挙げて事にあたり、事故もなく無事に開館できた事は大きな喜びであった。

5. 開館披露式典とオープンハウス

開館披露式典を4月7日午前11時から挙行し、各大学等の来賓義塾内外の関係者約300名が出席した。式典、テープカット、披露宴の後、館内見学が行われた。

5月22日には国公立大学図書館関係者を招いて新館の披露をするオープン・ハウスを行い、約200名の来館者があった。

6. P R 活動

新館の建築工事が進み、その外観が整ってくると、新館に関する問い合わせが増え、従来の広報チャンネルだけでは利用者の情報要求を満たせなくなってきた。情報センターでは早くから新館について特別のPR活動の展開の必要性を認め、具体的に次の様なPR活動を行った。

<新館ニュースの発行>

利用者の図書館利用をなるべく妨げず円滑な移転を図る為、①新館への移転計画とそれに伴うサービスの変更・停止、②新館の内容とサービス・システムの概要、③旧館改修工事計画などに関する情報を利用者に周知徹底する事を目的として、

「慶應義塾図書館・新館ニュース」を発行した。新館ニュースは昨年11月に創刊して以来、必要に応じて随時発行し、現在までに6号を発行している。

＜利用案内シリーズの作成＞

利用案内は従来1枚もののリーフレットとして図書館、研究室書庫棟、レファレンス・ルームのそれぞれについて作成されていたが、新館開館に伴い全面改訂が必要となった。そこで利用案内に強い関心を抱いていたスタッフが集まり、利用案内の改訂案を提案する利用案内検討会を始めた。検討会では内外の図書館の利用案内の比較検討から作業を始め、昨年10月次の様な利用案内の作成を提案した。

三田情報センター利用案内（改訂版）の作成について

1. 目的

- ① 新館開館に伴う図書館システムの変化を利用者にPRし、変化への適応を容易にする。
- ② 利用教育プログラム的一端をになうPrinted mediaとして新館の内容・機能・サービスを利用者に認識させ、図書資料を活用して自主的に学ぼうとする利用者に必要な情報を提供する。
- ③ 三田情報センターの使命と機能について利用者の理解を深める。

2. 配布対象

学部学生・大学院学生・教職員等の利用者

3. 配布方法

館内に常置し利用者が自由に入手できるようにするとともに、情報サービス担当で図書館利用オリエンテーションを行う際に配布する。

4. 編集方針

- ① 利用案内は一般的な利用情報と特殊な情報に分けて考え、別に利用案内を作成する。一般的な利用案内には、図書館の使命・利用時間・利用規則・フロアプラン・蔵書へのアクセス方法・サービス等の情報を盛りこむ。特

殊な利用情報に関する案内は、一般的な利用案内の補遺シリーズとして作成し、雑誌室・総合資料室・レファレンス・ルーム等各施設ごとの利用案内や資料の探し方などの案内を作る。

- ② 見易く、分かり易く、使い易いものにする。特に一般的な利用案内は小冊子体にし、デザインは専門のデザイナーに依頼する。
- ③ 情報センター内に編集委員会を設け、一般的な利用案内と補遺シリーズの全体的な統一をとる。

この方針がおおむね了承され、一般的な利用案内は当初15,000部作成する事が決まった。利用案内検討会ではメンバーを増員して一般的な利用案内の原稿を作成し、「慶應義塾図書館・新館利用ガイド」としてまとめられた。最終的に安西、渋川、東田、中島を加えた編集委員会で細部の修正を行い、昭和56年2月に実際の製作に入った。4月8日から配布予定であったが、印刷が遅れ、実際に配布できたのは4月20日であった。この間は急ぎで暫定版を作成配布した。特殊な利用案内のうち、一部は開館に間に合った。シリーズの残りは、その後原稿が出来次第作成し、現在も続刊中である。

＜サイン計画＞

新館は旧館に比べて約2倍の広さを有し、旧館の2.5倍の資料（約50万冊）を開架で提供する為、利用者は見知らぬ大規模な環境の中で資料を自分で探さなければならない。サインシステム計画はこの新しい図書館への適応を容易にし、利用者が自分で必要な資料とサービスの所在を見い出せる様に多種の利用情報を視覚的に統合されたシステムとして提供する事を目的として企画された。具体的なサインの内容については現場のスタッフを含めた情報センタースタッフが検討し、デザイン・製作・施工は五十嵐威暢デザイン事務所に依頼した。

現在新館に取り付けられている数々のメタリック塗装の室名などを標示したカラープレート、書

架ガイド、スタンド・サインなどがサイン計画で製作されたものであるが、文字が小さすぎる、照明が反射して読めないものがある、変更があって改訂の必要があるなど今後改善していかなければならない点がある。

<その他のPR活動>

開館前に教職員に対し、新館見学会を行い、新館のPRに努めた。また、新館の建築概要について紹介するパンフレットを作成配布した。

本年5月22日以降学外からの見学希望に応じて、随時見学案内を行っているが、これまでの見学者は1,728人である。

<今後のPR活動について>

サイン計画や利用案内といったPRメディアはそれだけで効果のあるものではなく、機能的な建築やオリエンテーションプログラム、各カウンターでの利用指導と相互に補完して役立つものである。そこで現状のPRメディアの改善といった狭い視野で今後のPRを考えるのではなく、この新しい建物を生かし、利用者に役立つ図書館の基本的なサービスの一環としてPR活動を位置づけ、パブリック・サービス部と連携して、さらにスライド・カセットテープ・ビデオなどの新しいメディアを利用したPR活動を展開していきたいと考えている。

閲覧・利用サービスとその展望

中島 絃一

(三田情報センター閲覧課長)

閲覧課は、新館の開館に伴う変革の影響を最も強く受けた組織の一つである。新館の完成は、ハードウェア面における図書館のイメージを一新し、これによって多くの人々を引きつけることが

できたし、今後も引きつけるに違いない。しかし、ハードウェア面以上に大切なことは、その内部で展開されるサービスのワクと質とを決定するソフトウェアの一部始終であり、長い目で見れば、その良し悪しが新館の評価を左右するものといえる。利用者と直接対面するサービス業務に携わることが仕事の大きな部分を占める閲覧課が大きく変わったのは、いわば当然の結果である。

閲覧課には、カウンターで利用者と直接接するオモテの顔とこれが管理する図書の保管場所の維持・整備を目立たずに行うウラの顔の二つの面がある。これを一言でいえば閲覧課の仕事は、参考図書、貴重書、雑誌・資料などを除くすべての図書について、これを保管し、利用に供し、利用の便宜を提供することである。移転準備のため、昭和57年2月3日に閉館するまでの閲覧課は、赤レンガの図書館を担当する第一閲覧と研究室書庫棟部分を担当する第二閲覧との寄り合い世帯であった。なぜ寄り合いかといえば、図書館と研究室書庫棟とは、組織的には情報センターという単一の機関に属してはいたものの、その実質はほぼ独立の組織に近いもので、例えば館外貸出し規則などにみられるように、その運営はかなりの部分各々独自のルールによって行われていたからである。新館の開館は、図書館図書、研究室図書の如何にかかわらず、原則としてすべてのコレクションの扱いを単一で統一したルールによって行うことを可能にした。このため、従来のやや不自然ともいえる姿がほぼ全面的に改善され、閲覧課における第一閲覧、第二閲覧の区別も解消されることになったのである。

◇コレクションの管理

閲覧課が守備範囲とする、単行書を中心とするコレクションの総数はほぼ100万冊に近い。これらの図書は、「比較的よく利用されるものは新館へ、そうでないものは旧館へ」という原則に従って、新館に約60万冊、旧館に約40万冊が配置されている。但し、新館に配置された60万冊の中には、そ



れほどよく利用されるわけではないが、良好な保存環境を必要とする和装本の全部、約10万冊が含まれている。また、旧館の40万冊の中には、研究室図書のうち経済学部、商学部の図書、約10万冊が含まれており、このコレクションは比較的良好に利用されている。これの旧館への配置は当該学部の要請によったわけである。

経、商の二学部以外の研究室図書は原則として全部新館に収容されている。従来は個室や共同研究室、研究所などの限られた人しかアプローチできない場所にあったものも可能な限り新館に集めることができた。

以上のように、一部に例外はあるものの、新館の完成によって図書の配置は所有者の別によってではなく、利用の実態に基づいて行うことができるようになり、しかも、有資格者であれば、殆ど誰もが容易に利用できるように改善されたのである。問題点があるとすれば、研究室図書は分類番号が学部、学科によって一つ一つ異なるため、書架上には学部、学科の単位ごとにそれぞれの図書を配架しなければならぬ、という点であろう。

新館に収められた単行書は地下一階から地下三階の書庫に展開されている。これらの書庫は、地下三階の一隅を除き、すべてオープンシステムで運用されている。旧館も含めて総合的にみると、慶應義塾の大学生は三田キャンパスの図書の大部分を自由に利用できる環境が保証されたわけである。

多数の利用者に書庫を開放すれば、それに応じて書庫の内部が乱れるため、シェルフリーディングなどの仕事の量が増える。また紛失本なども従来よりは増えるに違いない。これらに対応する施策をきちんと行うことが閲覧課に課せられた最も基本的な使命の一つである。

◇閲覧・利用サービス

慶應義塾図書館を利用できる有資格者は義塾の教職員、学生、塾員などである。このように資格者を特定することは入館者のチェックを行うこと

を意味する。このチェックを行うか否かについては、プランニングの段階で多少の議論があった。キャンパスの中にある施設である以上、その利用者は限られるのだから入館チェックは不要であるとする意見、入館チェックをやめればその要員を他の用途に転用できるから好都合であるとする願望などがあった反面、もしこれをやめれば周辺の他大学生、一般人、その他多くの利用者が自由に訪れて、その数が必ずしも充分ではない閲覧席をふさぎ、塾内関係者の利用を圧迫する恐れがあるとする慎重論などもあって、最終的には入館チェックを存続させる形でスタートした。

4月8日の開館から今日までの約半年間の実態は慎重論の方が正しかったことを証明している。即ち、一日平均の入館者ののべ数は4,000人から5,000人に及び、開館時間帯のかなりの部分にわたって閲覧席が満杯になってしまうという状況を呈したからである。入館者の大部分はいうまでもなく義塾の教職員および学生である。入館チェックを行って入館を有資格者だけに限定した結果がこれだったわけである。

予測を上回る入館者ののびは、閲覧席数の不足というあまり予期しなかった結果を招いたが、この外にも、例えば雑誌を利用する意図が全くない利用者が雑誌室の閲覧席を利用するなど、席の選択とその利用の意図とが必ずしも一致しないケースが大変多いことなどがプランとの関連で面感はずれの一面であった。

図書の利用については、そのルールが全体的により利用しやすい方向に変更されている。その主ないくつかを列記すると次の通りである。

- ① 午前9時だった開館時間が午前8時45分に早められた。
- ② 図書館図書だけだった学部学生の館外貸出し図書の範囲がすべての研究室図書にまで拡大された。
- ③ 2冊までだった学部学生の貸出し図書の冊数が5冊までに拡充された。
- ④ 一週間だった学部学生の貸出し期間が和書

は2週間、洋書は1ヶ月に延長された（但し、一部の研究室図書には別の期間が適用される）。

⑤ ロッカーに荷物を預け、カウンターに学生証を置いて入庫するという方式が全廃された。

⑥ 予約の制度が導入された。

ルールを修正した結果が利用にどう反映したかを定量的に把握するのはなかなか難しい。貸出し冊数の増減は一つの目安に過ぎないが、これについて昨年と今年の5月～7月の1日平均の貸出し冊数（図書館の単行書+研究室の単行書）を月別に比較すると次のようになる。

先ず5月では昨年が357冊で今年が471冊、6月では昨年が373冊で今年が464冊、7月に至っては昨年が255冊で今年が483冊、という結果がでている。すなわち、1日の平均でみると、5月は114冊、6月は91冊、7月は228冊という具合に今年の方が昨年より増えたわけである。このデータは旧館がまだ開館していない時のものであるから、これが開館すれば数字はさらにのびるだろう。

◇仕事の質の変化

従来カウンター業務は、開架書庫へ入庫する利用者が預ける学生証を管理し、閉架図書の出納、館内閲覧、館外貸出しなどの事務処理を行うことがもっぱら仕事の中心であった。

新館ではシステムが変り、学生証は預らなくなったし、閉架図書の出納も館内閲覧事務も殆どなくなったので、カウンターに残された事務処理業務の主なものが入館者のチェックと館外貸出しにかかわるものだけとなった。

代って著しく増えたのが外来者との応待、利用案内や指導、図書の所在調査などの利用者図書とを結びつける媒体としての役割である。

新館がオープンしてから目につく現象の一つは目録を利用する学生がめっきり増えたことである。この変化をもたらした原因の一部は、研究室の図書が学生にも開放されたことによって大量の

図書が直接利用できるようになったためであることは明らかである。

これまでの仕組みでは、旧館の第三書庫の1～2階の開架図書を利用するだけで用事の大半を済ませてしまう学生が殆どであった。開架書庫にはNDC分類の図書だけが収容されていたので図書は主題別にまとまっており、目的によっては必ずしも目録を検索する必要がなかった。見方によっては図書検索のイロハである目録利用の習慣が培われにくい仕組みであったといえるかもしれない。

プランニングの段階でこの点を批判して「開架書庫は全廃して図書はすべて出納方式にすべし。そうすれば学生は目録を利用するようになるだろう」という声があったことも事実である。

新館における目録利用者の増加は、ある意味で予期せぬ出来事であった。しかし考えてみれば、何種類もの分類によって整理された図書が何層にも分かれて配置されている新館では、もはや目録を利用しなければ求める図書に行きつくことができないのである。学生に目録の使い方を正しく指導する事がカウンターの重要な仕事の一部となってきたわけである。

この外、閲覧課の職員構成の特徴である「良質の男子労働力を沢山かかえている」という事実は、好むと好まざるとに拘らず、閲覧課の仕事の範囲を課内のものだけに限定することを許さないであろう。閲覧課には特に男子の労働力を必要とする時にはどこにでも駆けつけなければならない「機動部隊的な役割」が課せられているのである。構造的に女子職員が多い職場では、男子労働力を多くかかえる部課の場合に応じた柔軟な対応が必要なことはいうまでもない。

◇問題点と今後

現時点ではまだ改装工事が進行中の旧館は、遅くとも11月には開館にこぎつけられる見込みである。旧館におけるサービス、書庫管理など、業務の一切はほぼ全面的に閲覧課が担当する。経・商

の二学部のリビングコレクションを収容することになって、純粋な保存図書館とはいえなくなった旧館のサービス体制をどうするかは差し当たっての問題点である。三田におけるライブラリー・サービスは新館を中心に営まれるが、旧館収容図書をもっぱら利用する人々が少ないことが予想される以上、それなりの手当てが必要なのはいうまでもない。

旧館のサービスとの関連で特に懸念されるのは夜間の体制である。新館は現在、夜の9時までで開館している。従って、旧館も同じ時間までオープンすることが望ましい。文・法の二学部の図書が新館に収容され、夜の9時まで利用できる利便が存在する以上、経・商の図書についても同じ利便が保証されなければならないからである。

ところで、現在のスタッフで旧館を夜の9時までオープンするには相当のムリがあるように思われる。旧館に対するニーズによっては、当分の間午後6時頃に閉館するという暫定措置をとらざるを得ないかもしれない。

長期的な展望で将来をながめる時、閲覧課がその視野に入れておかねばならない課題の一つは、貸出し業務の機械化である。システムの変更によって、カウンターに残された事務処理業務の代表は殆ど貸出しにかかわる作業だけになったことは先に述べた通りである。この部分は機械化によって効率化し省力化できるところであり、具体化すればカウンター業務をより深みのある方向に導くことができるだろう。

閲覧課は非常に広い領域の管理責任を負わされている。施設面でみると、新館のB5F～2Fまでの閲覧室と書庫、旧館の情報センター使用部分の全部、並びに研究室地下2Fの約15万冊を収容できる書庫の三つである。カウンターの数も全部で三つある。このように広い守備範囲を最も効率よく管理し、良質のサービスを不断に提供することが閲覧課の使命である以上、そのノウハウは大変重要である。新しいノウハウに取り組む意欲をもち続けることは閲覧課の基本的な要件の一つである。

雑誌・資料の利用サービス

中島 紘一

(三田情報センター資料課長)

◇資料課の意義とその構成

新図書館が意図した大きなポイントの一つは、雑誌・資料類の管理と利用を飛躍的に改善し、増大するこの方面のニーズに対応し得る基盤を整える



ことであった。この目的を実現するために再編成された組織が資料課である。

雑誌・資料に関連する従来のサービスは、旧館の雑誌室における学生、教員向けのもの、研究室棟経商資料室における経、商学部教員向けのもの、同、法学資料室における法学部教員向けのもの、及び同、文学資料室における文学部教員向けのもの、という具合に4つのポイントに分散して行われていた。

組織的には雑誌室が情報サービス担当というセクションに属し、他の3つは第二閲覧に所属していたことから全般に機能的なまとまりを欠いていて、関連のサービスについて総合的な施策を打ち出しにくい状況にあった。課としての資料課が誕生した背景には、以上のような欠陥を是正したいという希望があったわけである。

新生の資料課は新館3階の雑誌室、4階の総合資料室、5階の図書館・情報学資料室という3つの単位から構成されている。3階雑誌室は旧館雑誌室と文学資料室とが完全に融合・合体したものである。4階総合資料室はかつての経商資料室と法学資料室とを原則として原形のままで収めたフロアである。また、5階の図書館・情報学資料室は、かつての文学部図書館・情報学科図書室で、機能的にやや前二者とは異なるものの、便宜的に資料課に属せしめたものである。

雑誌・資料の管理と利用の効率化という観点からみると、かつては施設的に離れた4つのポイントに分散していたものが同一の建物の3階と4階の2つのポイントにまとめられ、しかも両者は至近距離にあるという大変好ましい形に変化した。この点は画期的な改善であるといつてよい。

3階雑誌室はもっぱら学生と文学部教員のニーズに対応し、4階総合資料室は経、商、法学部教員（プラス大学院学生）のニーズに対応するという役割分担になっている。こうした役割分担に伴うコレクションの調整はまだ端著についたばかりだが、今後長い時間をかけて取り組んでいかねばならない課題の一つである。

◇旧館時代との相違点

利用サービスの面でもいくつかの改善が試みられている。まず、アクセス方式が完全にオープンになった。従来の旧館雑誌室は約3万冊を収容する「安全接架書庫」を中心にサービスが展開されていて、学生がこの書庫へ入る際は学生証を預託し、出る時は借用証を提出するという形がとられていた。「安全接架書庫」にない資料はすべて係員の出納による利用であった。また、研究室棟の雑誌・資料類は直接の利用ができず、係員の出納によって翌日旧館に運ばれたものをそこで利用するという仕組みであった。

新館では、3階雑誌室が文字通りの開架になったため、旧館時代の複雑な手続きが大幅に簡素化されたわけである。研究室棟の雑誌・資料についても、文学部のものは3階で直接利用できるようになった。また、経、商、法のものについても4階の総合資料室にまとめられているので、3階で所定の手続きを踏めばその場で4階へ行って直接利用できるように改善された。要するに、三田キャンパスにおいて雑誌・資料を利用する時は、新館にくれば殆どその用が足りるように効率化されたわけである。

オープンアクセスへの切り換えに際しては、配列の順序をすべて誌名のアルファベット順に変更

した。オープンアクセスの書庫ではこの方式が利用者には最も使い易いもの、という判断によるのである。

システムを以上のように変更した結果、特に3階雑誌室において、仕事の内容が従来とは異なるものになってきた。入庫者の出入りチェック、館内閲覧にかかわる事務、閉庫資料の出納などの従来からの仕事はほぼ全部消滅した。その代りに文献の所在調査、利用案内、4階総合資料室又は地下の保存書庫への利用手続きなどが、対利用者とのからみでは主要な仕事となってきたのである。

また、従来はあまり取り組めなかったコレクションの点検、評価、整備など資料課の最も基本的な仕事に対しても、徐々にではあるがより多くの時間を割り当てることができるようになるものと思われる。

◇開館から今日まで

4月8日の開館以来、3階雑誌室は学生にとって最も人気のあるフロアとして連日賑わっている。雑誌・資料を利用する学生はもちろんのこと、そうでない学生も、国家試験の受験勉強の塾員も、競って3階の閲覧室を利用しているようである。窓際の明かるい閲覧席からは建物の周囲の眺めもよいし、大変解放的で落ち着いた雰囲気を楽しむことができる。また、大きなキャレルも備わっているので、読書や勉強をする環境としては申し分のないところなのだろう。このフロアには、旧館の時の3倍の約150席が用意されており、プランニングの段階では「これで充分」という読みがあった。これまでの利用状況を見ると、結果は見事にアテが外れたわけである。

居心地が特に良い座席を相当長時間一人が独占するという現象もおきている。図書館を授業などで一時的に離れる時は、自分の荷物を机の上に置いたままでていく。このような座席は人は不在でも他の利用者がそのまま使うというわけにはいかないだろう。こうした利用慣行が雑誌室の座席不足に拍車をかける結果になっていることは否定

できない。同様の現象は環境的には3階以上に恵まれている4階の総合資料室でも目立ち始めており、やっかいな問題として今後に残りそうである。

◇今後の課題

かつての経商資料室と法学資料室とを収容する4階の総合資料室は、研究者のフロアとして、研究に必要な良好な環境を保つことが意図されている。数において圧倒的に多い学生の利用範囲を3階の雑誌室までにとどめ、学生が4階を利用できるのは、必要な資料が4階にしかない場合だけに限っているのはそのためである。この趣旨を徹底するため、3階のカウンターでは4階の利用を希望する学生のニーズのチェックをいちいち行っている。

開館してから明らかになったのは、この4階の資料の利用を希望する学生が予想外に多かったということである。新館の図書が全般的にきわめて利用しやすくなった中で、4階の資料の利用だけが妙に制限されていることに対して、当然のことながら学生の評判はよくない。

4階の資料が学生によく利用されるという結果がでて、別に驚くにはあたらない。もともと3階の資料は図書館（並びに文学部の教員）が、また4階の資料は経、商、法の学部教員がそれぞれのニーズを充たすために収集してきたもので、必ずしも3階は学生向け、4階は研究者向けという明確な方針に基づいて集められた資料ではないからである。

4階にかかわる学生の不便を4階の利用制限を撤廃することによって解消するという方法は一応考えられる。けれども、もし制限を撤廃すると、3階から溢れた学生が4階の閲覧室を常時占有し、そうでなくても不足気味の座席を本来の利用者である教員はいつ行っても利用できないという事態になることは火を見るよりも明らかである。そうなれば、研究者のフロアである筈の4階の機能は停止し、プランニングの基本方針は生かされ

ないことになる。

この問題を解決する基本的な方向は、学生のニーズはその殆ど全てをあくまでも3階の雑誌室で充たすことができるように、3階と4階のコレクションの調整を行うことである。この方針は、すでに収集済みの資料に対してばかりでなく、これから新規に受け入れるものに対しても適用されなければならない。最近、旧経商資料室が保有していた「有価証券報告書」のセットを3階に移転したのも、この基本方針に沿ったものである。

コレクションの調整には長い時間が必要である。また、特定の資料を評して、これは学生向け、これは研究者向け、などと簡単に割り切れるものではない。従って、調整の基準は、利用の実態に即してということになるであろう。

このような方針を念頭におきながら、不断にコレクションの評価と吟味に取り組み、その質の向上を目指すことが資料課の今後の課題の一つである。

また、雑誌資料に対するサービスの拡大のもう一つの課題は検索手段の充実である。現在はP I C Cとカード目録を併用しているが、双方に不完全な部分があり、十分な検索手段にはなっていない。P I C Cを将来は、受入から検索までオンラインで管理するシステムへ拡大していく計画もある。従って、まだ完全ではないノンカレント誌のデータのP I C Cへのインプットや、雑誌業務の標準化が、当面の課題となるであろう。

小展示ニュース I

- 57. 4. 7~30 「目で見える図書館目録史」
- 4. 21~24 「Dr. Derek S. Brewer 来館記念ブルーア関係出版物展」
- 5. 1~21 「学内出版逐次刊行物展」
- 5. 17~26 「西洋図書館目録史」
- 5. 20~21 「田村魚菜文庫展」

情報サービスの課題

東田全義

(三田情報センター
情報サービス担当課長)

1. 慶應義塾図書館新館とその利用者

三田キャンパスにおける図書館利用者の一般的性格は、旧館であろうと新館であろうと変りがない。日吉での教養課程を終えた人文社会系専門課程



の学部生、その大学院生、そしてその教員達である。それ以外にも他地区や学外の研究者も利用者の範囲にはいる。以上の利用者の一般的性格に変わりがないとすれば、変った点は、新館が建ったことによる物理的条件であるといえる。それは利用者にとって、利用条件の変更を伴うものであり、利用条件の変更は、図書館サービスの変更をも要求するものとなる。情報サービス担当から見てサービスに影響をおよぼす物理的条件には、次の二点が考えられる。一つは建物規模が拡大したこと、特に旧館書庫スペースをも含めた書架スペースの拡大である。もう一点は、研究室棟から少し離れて新館が位置していることである。一方、新館が建ったことによっても変わっていない図書館の性格がある。それは、一つの図書館が学習図書館と研究図書館を兼ねていることである。この点については、この新館計画初期の段階で論議されたことはあるが、結局現在の形に落ち着いた。その論拠というのは、所蔵図書に研究用図書と学習用図書との境界が決め難く、両用共通に必要な図書の量がかなりあることから、情報センター理念から見たサービス効率と、図書収集その他の経済性ということがあったと思う。

図書資料を研究用と学習用に区別し難いように、サービスについても区別し難いのであるが、

上記の物理的条件からくるサービスの重点強化については、学習者向けと研究者向けとに相対的に区別される面がある。学習者向けとは、書架スペースが広大なことで、図書館利用案内および利用指導を強化しなければならないことである。研究者向けとは、建物が離れているためにもすれば足が遠のきがちになる研究者に対して、マクロな情報システム、つまり図書館ネットワークへのアクセスを保証することである。このサービスは旧館においてもやっていたことであり、また学部生に対してはやっていなかったというわけでもない。いずれも偶発的受動的であったものを積極的に行うということである。ことに研究者に対してこのサービスを行うことは、学術図書館の必須の使命であり、まだ立ちおけている研究者へのレファレンスサービス開発の基礎づけともなるからである。一方、研究者に対しても図書館利用案内は必要であり、特に新館においては実際にそうであった。しかし、研究者は図書館員にものを聞くということをあまりしたがるらないということは一面の真実であり、長い年月のうちに固有の方法で図書館に精通していくという基本パターンをもっていることも確かである。それよりも学生は年々新人がたち現れるのであるから、学生への図書館利用指導は不断の課題となるのである。以下、相対的重点課題として、学生への図書館利用指導、研究者に対するマクロシステムへのアクセスの二点について述べよう。

2. 学生への図書館利用指導

上にも述べたように、広大な書架スペースに分散配架された図書は、学生がかなり自由に入庫できるとしても、図書館利用の予備知識なしには、目的を達することはまず不可能といってよい。まして、いわゆる学習用図書と研究用図書が混然一体となっているのである。ブラウジングということもいわれるが、ブラウジングとは、図書館事情をある程度以上に知っている人が意識的に行う探索法であろう。予備知識なしの書庫散歩は、群盲

象をなでているといった方が、適切な表現と言える。この現象は旧館においても観察されたことがらであるが、広くなった新館においては、図書館利用指導を受けることが、学生の必修課題となりそうである。もちろん、個々の学生からの個々の要求に対しては、一般のレファレンスサービスの一つとしての案内指導を行っている。ここでいうのは学年始めに行う、グループに対する積極的な利用指導のことである。

このサービスは旧館においても散発的には行われたことであるが、新館においてはその旨を公告して、グループ単位の申込みを受付ける。グループとは、ゼミナールまたは専攻を同じくするものである。受付の時点で他のグループや案内者の都合を調整した上で日時を決定する。そして準備にはいる。利用指導の形式は、ライブラリーツアーにビブリオグラフィックインストラクションを組みこむことである。特にビブリオグラフィックインストラクションでは、受付の段階でそのグループとの間でとり決めた主題またはトピックに適合した参考図書リストをグループ全員に配布し、説明もその主題に沿って行われる。指導の要点は次の三点である。第一は、蔵書目録類の見方とその請求記号と書架上の配置との関係、第二は、よりマクロなシステムとしての書誌索引類および他の参考図書類の案内指導とそれらを利用した場合の図書館での利用手順、第三は、主題文献探索としての雑誌論文記事へのアクセス、特にこの場合は、書誌索引類を仲介として利用しない限り効率が悪いことを強調する。以上をライブラリーツアーの中に組みこんで説明していくのである。グループの人数が多い場合は、10人前後のグループに分割する。その方が説明する側も聞く側もやりやすいからである。一度だけのツアーによる効果の程はまだわかっていないが、このサービスの究極の目標は、卒業論文作成のためばかりでなく、生涯学習の場としての図書館を利用した学習方法を開示することでもある。今後も、今年の実験データをもとにして検討を重ねていくことになる。

3. 研究者のマクロシステムへのアクセス

研究活動において必要となる情報を一館の蔵書資料からすべてを提供できないことは自明のことである。それを補完するサービスの一つとして、情報サービス担当によって情報のマクロシステムへのアクセスを保証している。情報システムといえば、一冊の図書・一館の蔵書・書誌類・国内の図書館ネットワーク・国際的ネットワーク等さまざまなレベルで存在しているが、ここでマクロシステムというものは、国内ネットワーク以上のシステムのことである。ネットワークといっても、現在、国際的にも国内的にも明確な共通ルール規則があるわけではない。したがって、現在利用可能なルール・様式のもとで行うものであり、もちろん新しい手続方法の開発も目差している。より身近かな表現でいえば図書館間協力ということになる。このサービスは旧館時代も行ってきたものではあるが、それは常連来館者、彼らのくちコミでやって来る利用者、それと緊急の要求をもった利用者に限られていた。それを新館開館以後は公告して行うのである。新館三カ月の実績を昨年同期と比較すると確実に件数が増加している。幸いにも科学技術系を扱っていないので、極端な増加ではないものの、レファレンスサービス全体に占める仕事量の比率に変動が見られるようになった。レファレンスサービスにとっては補助的な作業である、参考図書の受入れ配架、目録類の編成などの大部分は、アルバイトに依存しなければ処理し切れなくなっている。

マクロシステムへのアクセスにともなる要求を満たすサービスの種類としては、文献所在調査、所蔵館への紹介と複写依頼、あるいは購入希望の受付などがある。これらのサービスには、必ず正確で十分な書誌事項調査がともなる。調査には時間と手数のかかるものも多いが、調査の結果、実際は自館に所蔵していたというケースが必ず何割かは存在しているのであり、他館に依頼する場合もそれによって、所在調査はもちろん文献入手も確実なものとなる。生命財産を扱う医者なり司法

家が、専門職として失敗が許されないと同様に、図書館司書も書誌事項を扱う以上は、その間違いは許されないものである。

マクロシステムへのアクセスとして、主題文献探索、書誌事項確認、所在調査のための道具立てが必備となる。人文社会系は、主題が複雑多様に入り組んでいるために、文献を二次的時空的に網羅することは、まだ今後課題を残しているとしても、マクロシステムを拡張し、あるいはそのきめ細かい調査を可能にする道具立てはかなり充実してきている。新館になって本格的に利用を始めたLCマークの端末機もその一つである。

最後に最も重要なことであるが、利用者の要求を聞き取る技術と道具立てを臨機応変に使いこなす知識とを、個々の担当者はもちろん課として集団的にも向上させていくことは、図書館サービスにおける恒常的な人間的要素の課題である。

選書課の誕生と今後の展望

東 田 全 義

(三田情報センター選書課長)

1. 収書課から選書課へ

旧収書課が整理課と新しく選書課とに解消されたについては、現在のところ積極的な意義はもっていない。選書課の誕生は主として次のような理由による。旧収書課は、

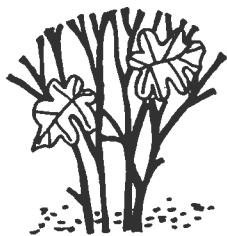
研究室棟一階に位置し、三田情報センターの図書受入業務と同時に選書事務と対教員サービスの窓口として注文の受付、特別図書の処理引渡しなどを行っていた。一方新図書館は、研究室棟玄関から約70米の所に入口が位置している。そして新館一階は、サービスフロアとしてパブリックサービス部が主として占め、収書整理業務のテクニカ

ルサービス部は、最上階の六階に位置することになった。その場合、収書課の対教員サービスの窓口が六階にあるのでは余りにも不便であるところから、対教員サービスの窓口と選書事務の部分を収書課から切り離して、選書課として一階に設けることになったのである。

2. 選書課の当面の業務

(選書事務) 見計い図書選定のための準備として、見計い図書の収集展示をする。図書の選定は常時行うことになっているが、その場合、選定と返却のサイクルが問題となる。展示用書架スペースが以前よりも少なくなったので、展示期間を長くすると図書が溢れるし、短かくするとすべての見計い図書にすべての選定者が目を通すという原則に依り難くなる。さし当って試行的に展示期間を約一週間として、選定者および業者に協力を訴えかけることにしている。次に選定された図書の重複調査がある。予算項目が図書館および各学部とに分かれているため、その各部門間の重複調整がある。センターのサービス体制としては、たとえ何の部門で購入された図書であれ、利用者はほぼ平等に利用できる機会が与えられているわけだが、図書によっては、二部門での重複購入、時には一部門内での重複購入もありうる。そのための調整は、選定者の記入メモまたは両選定者との連絡によってなされる。高額図書(雑誌のバックナンバー、稀購書など)の選定については、購入希望を常時受付けておいて、選書委員会において決定していく。選書委員会は、高額図書選定も含めて、議題があれば適宜開くことになっている。

(図書注文の受付) 注文を行うのは、学部教員および図書館選定委員である。見計い図書として受入れられないものについては、注文の形で受入れられることになる。注文のための書誌情報の流れはさまざまである。選定者の日常活動の中から得られるものとして、被引用文献や出版広告などもあるが、選書課が収集している内外の出版情報もある。これら集められた出版情報は、主題に応じて



的確に選定者の手元にゆき渡るのが理想的なのかも知れないが、現在はそれができる事情にない。今できることは、それらの書誌情報をできるだけ見やすく整理して、選書課にとりそろえておくことである。したがってこの場合も選定者の協力をまわって、選書課に足を運んでもらうことになる。幸いにも、特別図書の注文・引渡しなどの窓口もなっているのだから、教員達が図書館へ足を運ぶ機会もあるというものである。この点新館においては、図書の選定・注文の窓口・見計い図書の展示・出版情報としてのカタログ類の展示も、それらのみが選書課に集中して一所にあることは、旧収書課と比較して、窓口の機能が理解しやすくなったといえよう。

次に新館になってから正式に設けられた制度として、学生からの購入希望図書の処理がある。学生は所定の用紙に購入希望図書名を記入して、パブリックサービスの各窓口で受け取られたものが選書課に回送されてくる。それに対して、新規購入として発注、受入れているがまだ整理中、入手不可能、受入れに不適、高額なために選書委員会にかける等々の回答を書いて閲覧課へ戻す。そして閲覧課はそれを掲示するという、どこの大学図書館でもやっていそうな手順ではあるが、旧収書課ではやっていなかったサービスを選書課で行うことになった。このサービスは、次に述べる選書課の今後の展望において萌芽的なサービスの手掛りを与えるものでもある。

3. 今後の展望

上にも述べたように、見計い図書の選定とその重複調査、注文の受付、特別図書の受付処理などを通して、選書課員は図書選定者と対話することになる。また間接的ではあるが、学生とも購入希望図書の処理を通して対話をしていることになる。こうした対話の蓄積は、図書館利用者の要求を知るための情報源となり、ひいては新しいコレクション構築のための手掛りともなるのである。選書業務のこの側面を敷衍していくと、レファレ

ンスサービスをはじめとしたパブリックサービスにおけるきめ細かい利用状況を把握することにつながり、さらに推しすすめていけば、蔵書の調査研究を通して、コレクション特性の拡大深化、不完備なものの発見とその補充、そして利用者の要求を先取りした収書業務へとつながっていく。つまりレファレンスビブリオグラファーへの道である。

しかし、今の選書課にはまだ基礎的なデータも経験もない。何よりも人力に乏しく、上に述べたルーティンワーク的業務すらが手に余っているというのが実状である。ただ、レファレンスビブリオグラファーへの道が、選書課の射程範囲内にあることを自覚して、必要な情報を蓄積していくことが必要となろう。

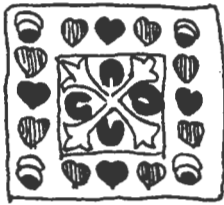
現在ルーティンワークの範囲内ではあるが、試行的にやり始めたものが一つある。見計い図書の選定作業を多少なりとも軽減し、しかも必要な学術書の選定漏れをも減らそうとする試みである。それは一定の学術出版社の新刊書をすべて機械的に購入していくことである。この場合も単純な過程ではなく、出版社の選定をどうするか、その出版社が出す非学術書とか科学技術系の専門書をいかにして除いていくかといった問題点がある。もちろん書店・取次店の協力を期待するとしても、どこまでうまくいくかはわからない。いずれにしても試行的に動き出したばかりであり、その効果も成果もまだわかっていない。もしうまくいけば、外国の出版社についても適用できるかもしれない。

小展示ニュース II

57. 5.22～30 「中世装飾写本とインキュナブラ展」
6. 8～26 「西脇順三郎著作展」
7. 1～14 「EC関係資料展」
7. 15～9.30 「池田彌三郎（追悼）著作展示」
10. 17～30 「芸術における象徴性—シェーデル世界年代の『死の舞踏』展」

図書の収集と目録サービス

森 園 繁
(三田情報センター整理課長)



慶應義塾図書館(新館)へ移ると同時に、収書課は廃止されました。収書課は新研究室1階で、三田情報センター発足以来12年間、情セサービスの一端を担ってまいりました。おもな仕事は、新

刊・古書の選書及び発注、教員特別図書(特)の受付け、雑誌の受入れ、図書予算の管理などでした。学生諸君には染みの薄い課でしたが、教職員の方にはだいぶ親しんでいただいたと思います。廊下伝いの図書展示室では、毎月の見計い図書展示会と並行して、図書館図書委員会・各学部図書委員会が開かれて参りました。その席上購入の決定した資料は、三田情報センターの貴重な蔵書を構成するに至っております。

図書展示室・見計い図書・予算・雑誌・(特)等々のイメージの交差する収書課の業務は、新館では下表の如く3つの課に分かれることとなります。

	新館での担当課
選書・(特)等	1階の選書課
雑誌受入等	3, 4, 5階の資料課
図書の発注・受入, 予算管理等	6階の整理課

収書課の仕事の過半を占めておりました発注と受入れ作業が、新研3階にありました整理課に吸収され、新館6階での整理課となります。収書課のフロアでは、見計い図書と注文図書とが混在しておりましたが、新館ではこの点は明らかに分かれており、見計い図書は1階選書課、購入図書や発注は6階整理課扱いとなります。

目録分類

購入の決定した図書が、書架に配架されるまでには、幾つかの処理を済まさなければなりません。義塾の財産に伴う支払いや登録作業はその第一ですが、一番の難関に目録を採り分類を決定する作業が待っております。“難関”の意味は、この仕事には相当の熟練と時間がかかるからです。この段階を正確かつ短時間に処理すれば、それだけ早く利用につながり、望ましい姿に近づくこととなります。

が、ある図書の目録・分類をとることは、図書の内容を理解できることが前提となります。理解度の深浅に生じる個人差を調整し、一点一点内容の異なる図書につき、納得のいく書誌事項を判断し記載し、且つ分類番号を決定するには時間が掛ります。外国語の知識の多少が又作業の早さに大きく影響致します。最近では、従来のヨーロッパ諸語以外に、中国語・韓国語又アラビア語・ペルシャ語等の東洋諸語の文献も購入が進み、外国語の範囲も広がりつつあります。

数値でみますと、昭和56年度受入図書は、和書約23,000冊、洋書約27,000冊、計50,000冊。一方目録をとった図書は和約16,000冊、洋約20,000冊、計36,000冊。特に56年度は、新図書館への引越準備と言う特殊事情に大部労力をとられ、処理能力は例年の70%に終わざるを得ませんでした。

一方目録作業を一日でも早める一方法として、既製の目録カードを積極的に活用しております。同一の図書の目録を、すでに他館でとり終わってれば、そのデータを借用することができます。特に洋書文献は、書かれた言葉を母語とする人が目録・分類を行えば、信頼度も又高いと考えられます。そうした目録データをコンピュータ用に仕様し、相互利用に供する、こうすれば多くの図書館に益を与えるであろうことは疑いありません。現代の図書館で合理化すべきは目録であると、往々言われもし、又その解決にコンピュータ・カタログが考えられるのも当然であります。

遡ってみますと、1960年代にアメリカで芽生え

たこうした思想はやがて Library of Congress (議会図書館) で実現されることとなります。機械可読目録 Machine Readable Cataloging (MARC) の誕生です。三田情セ整理課でも L. C. MARC の恩恵を蒙っており、毎年30%前後の図書を L. C. MARC で処理致しております。洋書全部に程遠いのは、MARC にインプットされているデータに、収録年数の制限がある為で、現在は1968年以降出版の図書が対象となっております。又内容も納本制度により議会図書館に受け入れられた米国内出版物が中心です。三田情セのように、洋書の古書を年間幾千冊も購入、各国語の図書を処理しようとすれば、L. C. MARC の利用可能数も自ら制限されてまいります。

書誌情報の相互使用を国際的に可能にする機械可読目録は、議会図書館の L. C. MARC に限りません。議会図書館の如く巨大な館で、且つ他館から範とされる目録を多年生産している機関であれば、独自の MARC システムを開発する価値があります。

が、一方では一館中心主義に終らず、加盟数百館が目録作成に参加する分担共同目録作成システムの成長も顕著で、この例に OCLC (On-line Cataloging Library Center) や UTLAS (University of Toronto Library Automation System) があります。館種を越え、国境を越え、相互利用のネットワークを組織する旨さは、アメリカ人の国民性によるのでしょうか。

翻って、国内では国立国会図書館が、JAPAN MARC を開発致しました。国立国会図書館に納本された資料を内容とし、アルファベットとは異質の日本語文献をコンピュータ化し、販売しているものです。三田情セでも過去3年分のデータをすでに購入し、近々実用化を目指し研究中です。但し、JAPAN MARC の収録データが、どの程度実際の業務に活用できるかの疑問は残ります。三田情セで購入する新刊図書の書誌データが、まだ JAPAN MARC にはインプットされていないであろうとの懸念です。毎月納品される新刊図書

とコンピュータカタログングがどれだけ近づけるか。このタイム・ラグの課題が解消されないと、実用面での価値が大幅に減らざるを得ません。

即ち日本外国を問わず、MARC のデータが新刊書にも古書にも時間的に幅が広がる程整理課の仕事にプラスし、利用の迅速化にも結びつくこととなります。JAPAN MARC データの速報性が特に望まれる所以です。

又 MARC のデータは無批判に利用できる訳ではなく、三田情セで維持している分類体系にいかにもスムーズに組込んでいくか、の問題も残ります。

収 書

目録をひとまず離れ、図書の収集に移りますと、和洋共にここ数年見計り図書が延び悩んでおりました。和書は出版流通機構に支障があるのではないかと、洋書は変動相場制の現在手間暇のかかる在庫を業者が敬遠するのではないかと、等考えられます。

和書については、流通機構が円滑に働いていないのではないかとこの疑問は、ジャーナリズムでも再三話題にのるテーマで、読書人ならずとも関心があるのではないかと思います。選書用見計り図書を業者の持込みに頼っている今の組織では、納品される前の段階で既に選択が行われざるを得ません。現在市場に流通している新刊和書は、「日本書籍総目録」(1982年版)では、約30万点。昨56年度に出版された和書は、「出版年鑑」(1982年版)では29,362点。この外政府刊行物を含めると更に数千点増加し、大変な数量になります。学術図書と限定しても、その点数は数万を下らないでしょう。こうした洪水とも云える出版物から、良書を蔵書に加えるには、業者の営業努力に待つのもさることながら、一方三田情セなりの購入方針の改善も計ってまいりました。

その第一の試みとして、昨56年度には、和書の遡及購入計画を実施致しました。過去10年程の間に買い漏らしたと思われる図書を発注し、約4,000

冊の学術図書を蔵書に加え得ました。今年度も週及調査を続行し、和書コレクションの充実を計っていく予定です。

又週及購入と並行し、これから出る本に関しては、特定出版社の出版物は全部購入対象とする一括購入（プランケット・オーダ）計画を57年度に実施致します。初年度は、24社を選定、実用書・児童書・重版等を除き、全出版物の購入を考えております。初年度の結果が良ければ、次年度以降の拡大も考えております。

指定出版社一覧

角川書店	岩波書店
新潮社	有斐閣
筑摩書房	平凡社
東京大学出版会	三省堂
白水社	吉川弘文館
法政大学出版局	東海大学出版会
みすゞ書房	御茶の水書房
弘文堂	早稲田大学出版部
青林書院新社	商事法務研究会
理想社	研究社
大修館	紀伊国屋書店
創文社	東洋経済新報社

検索手段としての目録

一冊の図書を購入し、目録・分類作業も済み、書架に配架されると、残るは検索手段としての目録体系の問題です。ある図書が、著者名からも、書名からも、又分類や件名からも、自在に検索できるのが、望ましい手段でしょうが、各館の目録の由来もあり、その種類も自ら限定されているのが実情です。

三田情せでは図書館と学部の日録をインターフェイスしてあるのは、新研究室3階の通称「合同目録」だけでした。この目録は、主に著者名から引く目録です。

それを今回、新図書館移転を機に、「著者名合同目録」の外に、「書名合同目録」を準備中です。まず「和書書名合同目録」は既にファイリングを

終り、図書館（旧館）1階と新研究室3階に分割されていた書名目録が一本化されすっきり致しました。

一方洋書書名目録は、学部図書には早くからあったのですが、残念ながら図書館図書には欠けており、不便を感じておりました。図書館洋書25万冊への書名カードを備えるのは大仕事であり、容易には手をつけられない作業でした。が、それも現在進行中であり、念願の洋書書名合同目録も逐次成りつつあります。

著者名と書名が図書館・学部一本化された後、考えられるのは分類目録の統一です。求めるテーマの資料で、所蔵中のものを一目明らかにしてくれるのが、この目録です。図書館図書には、1962（昭和37）年より日本十進分類法に基づく分類目録を蓄積してまいりました。新図書館1階にある和・洋分類がそれであります。

然し、学部図書は現在分類目録を持っておりません。各学部、又各専攻独自の分類表を備え、且つその間に共通性はなく、分類コードによるインターファイルは不可能です。但し、学部図書であっても、予算を図書館予算に繰込み、図書館図書と同じ整理プロセスを踏む場合は、自然書架上も分類上も、図書館資料と一緒に配架されファイルされます。文学部英文科、仏文科の図書は、大部分このシステムで処理されています。又予算は学科として保持し、分類だけを図書館と同じにしている科に、図書館・情報学科と教育学科がありません。

目録案内

新館の日録体系は以上が大体の姿ですが、実はこれはカッコ付きであります。分類目録の所で触れた「昭和37年以降は日本十進分類法で云々」は、裏返せば昭和36年迄は、図書館独自の12門分類で整理されていたのを意味いたします。こうした事情は分類のみならず、何年迄の図書館和書書名は、何年迄の洋書著者名は、何年までの何々等々は、別置冊子体目録を参照すべし、と言う条件つ

きであります。

慶應義塾図書館創立以来既に七十数年。この間
目録の維持には幾度も変化がありました。大きな
時代の流れを考えれば、当然の変化でもありま
す。ある時は目録の基本に係わる目録規則の変
更、ある時はカード形式より冊子体目録への切り
換え、又カードの大きさや字体の変更など。いず
れの場合も、一旦新しい形を採用しても、古い従
来の形も並行して利用しなければならず、検索方
法は新旧共存しており、利用にとまどいを憶える
人も多と思われる。同じ日本十進分類表で
も、七版（旧版）と八版（現行版）では、分類番
号の内容が異なることもあり、七版八版の番号が
混在している今の分類目録では、2個所又はそれ
以上のコードを検索しなければ充分でないこと
になります。「目録案内」は、一例としてあげた
こうした問題を解決する為に、新館目録フロアに
新しく設けられた係りです。

アメリカの大学図書館は、蔵書数100万冊以上
は珍らしくなく、200万以上の図書館も点存致
します。目録体系の内容も、冊数の増加に比例して
複雑になってまいります。そこで見受けられるの
が「目録案内」係りですが、日本ではこうした制
度はまだ皆無であろうと思われま。利用者から
みて価値ある「目録案内」とは、どう言う内容
であるのか。試行錯誤、日々の実例を集めつつある

		内 容
著者名目録	和書	図書館と研究室カードを一本化してある。
	洋書	同 上
書 名 目 録	和書	図書館と研究室カードを一本化してある。
	洋書	研究室カードに図書館カードを組込み中。
分 類 目 録	和書	図書館カードのみあり。研究室蔵書には分類目録なし。
	洋書	同 上

のが現状です。

図書館（新館）での目録体系はカード型式が主

体で、上述の内容を表にしてみますと、左下表の
3種類が1階目録フロアに設置されております。

付(1) 冊子体目録には次の種類がある。

洋書	1. Catalogue of the Keio University Library (classified), 1929刊
	2. 慶應義塾図書館分類目録（洋書の部）4冊, 1977刊
和書	1. 慶應義塾図書館和漢図書目録, 明治45刊
	2. 慶應義塾図書館和漢図書目録, 4冊, 昭和11~17刊
	3. 慶應義塾図書館分類目録（和漢書の部）8冊, 昭和52刊

付(2) 新装成った図書館（旧館）には、サービ
ス・フロア（旧レファレンス・ルーム）に次の著
者名目録を1セット備えている。

慶應義塾大学三田情報センター蔵書目録・

（著者目録篇）

洋 書 篇 22冊

和漢書篇 15冊

この冊子体目録は、57年初め迄研究室3階にあ
った合同目録を冊子にしたものである。内容は、
55年3月迄整理済みのものを含んでおり、同年4
月以降の図書はカードで補っている。

付(3) 上記の目録は主に図書についてであり、
逐次刊行物は、雑誌室、総合資料室に最新の目録
がある。

情報センター・スタッフによる研究発表

磯宏美（三田情報センター、情報サービス担当）
昭和57年度（第43回）私立大学図書館協会
研究会、昭和57年7月23日、法政大学図書館
（論題）

慶應義塾大学における情報検索サービス
武井恵子（三田情報センター、総務課）
第18回ビジネス・ドキュメンテーション研究
集会、昭和57年8月19日、いわき新舞子ハイ
ツ（論題）

慶應義塾図書館・新館開館に伴うPR活動

慶應義塾図書館（新館）

利用者アンケート調査

風間 茂彦

(三田情報センター選書課)

<はじめに>

慶應義塾図書館(新館)は、去る4月8日にオープンした。そこで、三田情報センターでは、その新たなサービス、新たな施設に対し、利用者がどの様な感想を持ち、さら



に、どの様な要望を持っているかを知り、当センターの今後の方針に生かす為、アンケート調査を実施した。この調査は、去る7月13日に、その対象を学生に限って行なわれた。配布数1,000に対し、605の回答を得、十分なサンプルを集めたと考えることが出来る。そこで、今回は、この誌面を借りて、その結果を報告すると共に、若干の考察を加えてみたいと思う。

<アンケートの概要と集計結果>

今回のアンケートには、右記の様な体裁のアンケート用紙を用いた。質問は、30の一般質問と、フリー・アンサーから成っていて、質問のそれぞれには、「全面的な否定」(まったくそう思わない)から「全面的な肯定」(まったくそう思う)まで、5段階にわたる回答が用意されている。そして回答者は、それぞれ、一つを選択することになる。右記のアンケート用紙の回答欄には、今回集計された回答でプロットされた、それぞれのパーセンテージを記しておいたので、参照していただきたい。尚、欄外に括弧中で示されているのは、無回答のパーセンテージである。(図I参照)

<考察>

さて、ここでは、得られた結果を、より明確な

図 I

慶應義塾図書館・新館についてのご意見お伺い

新図書館が開館してもう3ヶ月立ちました。皆様には新しい図書館にお慣れになったことと存じます。

私どもは、この新しい施設だけでなく、利用に関する方法やしきみについても自信をもって皆様へ提供しました。しかしながら私たち自身この建物で皆様へサービスするのは初めての経験であります。ですから、気の付かないこともあるのではないかと心配しております。

本日は、こうした形で、新図書館についての皆様のご感想とご意見を伺いたいと存じます。ご協力いただければ大変幸いです。

昭和57年7月

慶應義塾大学三田情報センター

I 最初に下記の項目についてこの図書館のご感想をお尋ねいたします。以下の方法にしたがってお答えください。

回答の方法

a	b	c	d	e
まったくそう思う	まあそう思う	えんらうとも言えない	わんらうとも思わない	まったくそう思わない

三田のキャンパスは緑が多く美しい。

(なお、a・b・c・d・eの判断がつかない時には記入しないでください。)

- | | a | b | c | d | e | (%) |
|--|----|----|----|----|----|------|
| 1. この図書館を便して幸である。 | 48 | 36 | 4 | 1 | 0 | (7) |
| 2. 建物が立派すぎてぜいたくである。 | 7 | 22 | 18 | 32 | 11 | (6) |
| 3. この図書館の蔵書は豊富である。 | 12 | 42 | 16 | 17 | 3 | (7) |
| 4. 前の図書館とくらべて使い易い。 | 28 | 23 | 14 | 4 | 1 | (20) |
| 5. 書庫に自由に入出りでき、読みたい図書を自由に探せて便である。 | 26 | 42 | 12 | 9 | 2 | (7) |
| 6. 「利用案内」(パンフレットやリーフレット)など詳しく、わかり易いのでとても助かっている。 | 7 | 35 | 25 | 18 | 3 | (10) |
| 7. 施設の案内や利用手段のガイド(掲示やサイン)がはっきりしていてわかり易い。 | 7 | 27 | 25 | 24 | 4 | (9) |
| 8. 図書館員の利用案内が適切なので不自由を感じない。 | 16 | 38 | 23 | 7 | 2 | (11) |
| 9. 図書の貸出冊数や貸出期間は、いまのままで丁度よい。 | 10 | 47 | 13 | 12 | 5 | (10) |
| 10. 読まない図書や雑誌を探すのに目録を引いてすぐに見つけられる。 | 6 | 37 | 21 | 19 | 5 | (9) |
| 11. 目録利用案内の係員が目録のそばに居てくれるのでとても助かる。 | 8 | 26 | 29 | 16 | 3 | (16) |
| 12. レファレンス・カウンターの職員の利用指導や案内は非常に的確で自分の勉強の手助けになっている。 | 12 | 28 | 30 | 8 | 1 | (18) |
| 13. 閲覧席はすわりごちがよくなり勉強ができる。 | 28 | 42 | 10 | 7 | 3 | (6) |
| 14. 全体的に明るさ・換気などは良く、長時間勉強していてもあまり気にならない。 | 29 | 37 | 11 | 11 | 3 | (6) |
| 15. 館内のあちこちに絵画や彫刻がありますがこういう雰囲気は気に入っている。 | 25 | 36 | 19 | 8 | 2 | (7) |
| 16. ときどき行われる図書展示は有益である。 | 8 | 28 | 39 | 8 | 2 | (16) |
| 17. 購入希望図書を受け付けてもらえることはとても良い。 | 21 | 44 | 18 | 1 | 0 | (13) |
| 18. 音楽会・映画会・講演会がときどき催されているが、それは良いアイデアだと思う。 | 25 | 40 | 16 | 2 | 1 | (13) |
| 19. いろいろな施設があって、ほうぼうの隅に分かれているので不便である。 | 11 | 17 | 30 | 27 | 4 | (8) |
| 20. 玄関の出入口が狭く混雑して入りにくい。 | 11 | 26 | 14 | 37 | 3 | (7) |

	a まったく 思う	b まあ 思う	c どちら とも 言 えない	d あまり そう 思 わない	e まったく 思 わない	(%)
21. 地下書庫への入口(とくにB1FからB2F)がわかりにくい。	17	34	12	22	5	(8)
22. エレベータが少なく、待ち時間が長いのは不便である。	13	20	20	30	5	(8)
23. いつきても閲覧席がふさがっていてすわれない。	10	23	23	28	4	(8)
24. 目録の照明が暗いところがあって、カードが見にくい。	3	10	24	40	6	(14)
25. 目録ホールは狭く混雑しているのでゆっくりとカードを調べてもらえない。	4	18	23	37	4	(12)
26. 一般に利用手続や利用の制限が多く不便である。	8	18	26	31	2	(11)
27. 玄関付近は雨の日に滑りやすく危険を感じる。	25	27	14	20	2	(8)
28. 玄関のブック・ディテクション・システム(無断帯出防止装置)の機械は出入りのときわずらわしい。	9	13	15	37	14	(9)
29. キャレル(個室)が特定の利用者に独占されているのは困る。	29	22	18	15	3	(10)
30. 複写機が使い易いところにある。	5	29	24	19	10	(10)

II いま、あなたがこの図書館について不便なことや問題だとお考えのことがありましたら、重要だと思われることを三つまで、その順番にお書きください。

1. 最も重大なこと

2. 次に重大なこと

3. 三番目に重大なこと

形にする為に、それぞれの項目の指数化を試みた。すなわち、a:「まったくそう思う」、b:「まあそう思う」、c:「どちらとも言えない」、d:「あまりそう思わない」、e:「まったく思わない」の各5項目に、それぞれ、「+2」「+1」「0」「-1」「-2」の重み付けを施した。そして、各質問毎に加算して指数化を行なった。そして、各質問とも、指数が大きい程、プラスの評価が与えられ、逆に、小さい程、マイナスの評価が与えられたものと理解できるようにした。さらに、上記30の質問を、「全体的印象」「施設」「規則・運用」「その他」の4つのカテゴリーに分けて、それぞれの指数をあらわしてみた。(図II参照)

まず(I)では、ほとんどの回答者が、この新館に対して、良いイメージを抱いていることがわかる。(1)が、789という、今回のアンケート中、最高の指数を獲得していることがすべてを物語っているといえる。しかしながら、そこにあらわれた「幸せ」が、(3)の蔵書の豊富さと直接結び付かないところが不思議である。もう一度、学生の中での図書館の位置づけを考えてみなければならない、さらには、この問題は、大学図書館に於ける蔵書のあり方といったことに発展する。

(II)は、平均でみると、カテゴリー別で最低の指数である。この中で特に著しく評価が低くあらわれているのは、(29)である。同種の(23)では、それ程のマイナス評価でないことと考え合わせると、たとえば、特定の利用者が、荷物を常時机の上に置き放っておくなどして、一日中、指定席の様にキャレルを確保しておくといった利用形態を指摘する声であろう。これについては、フリー・アンサーの部分でも十分に指摘されており、中には、学生相互の倫理的判断にまかせずに、図書館側でのコントロールを望む声さえもあらわれている。次に、(27)に対しては、情報センターとしても、外側の部分に、すべり止めの構を掘るなどの対策を施したが、まだまだ危険を感じる様である。特に、鋭角に切り立った大理石の階段に危険を感じる声は多い。(21)は、1Fか

図 2

	(指数)
I: 全体的印象	
1. この図書館を覚えて幸せである。	789
2. 建物が立派すぎでぜいたくである。	104
3. 前の図書館と比べて使い易い。	479
4. この図書館の蔵書は豊富である。	263
平均.....	409
II: 施設	
13. 閲覧席はすわりごちが良くゆっくりと勉強できる。	524
14. 全体的に明るさ、換気などは良く、長時間勉強していてもあまり気にならない。	478
15. 館内のあちこちに絵画や彫刻がありますが、こういう雰囲気は気に入っている。	459
19. いろいろな施設があって、ほうぼうの階に分かれているので不便である。	- 17
20. 玄関の出入口が狭く混雑して入りにくい。	- 33
21. 地下書庫への入口がわかりにくい。	-222
22. エレベーターが少なく、待ち時間が長いのは不便である。	- 36
23. いつきても閲覧席がふさがっていてすわれない。	- 44
24. 目録の照明が暗いところがあってカードが見にくい。	208
25. 目録ホールは、狭く混雑しているのでゆっくりカードを調べられない。	119
27. 玄関付近は雨の日に滑りやすく危険を感じる。	-218
28. 玄関のブック・ディテクション・システムの機械は出入りのときわずらわしい。	206
29. キャレルが特定の利用者に独占されているのは困る。	-263
30. 複写機が使い易いところにあると良い。	2
平均.....	69
III: 規則・運用	
ガイド・利用案内	
6. 「利用案内」など詳しく、わかり易いのでとても助かる。	145
7. 施設の案内や利用手続きのガイド(掲示やサイン)がはっきりしていてわかり易い。	47
10. 読みたい図書や雑誌を探すのに目録を引いてすぐ見つけれられる。	122
平均.....	105
人的援助	
8. 図書館員の利用案内が適切なので不自由を感じない。	360
11. 目録利用案内の係員が目録のそばにいてくれるので、とても助かる。	117
12. レファレンス・カウンターの職員の利用指導や案内は、非常に的確で自分の勉強の手助けとなる。	246
平均.....	241
規則・規定	
5. 書庫に自由に入出入りでき、読みたい図書を自由に探せて便利である。	490
9. 図書の貸出冊数や貸出期間は、いまのままで丁度よい。	273
26. 一般に利用手続きや利用の制度が多く不便である。	22
平均.....	262
Ⅲ全体の平均(全体).....	202
IV: その他	
16. ときどき行なわれる図書展示は有益である。	189
17. 購入希望図書を受け付けてもらえることはとても良い。	509
18. 音楽会・映画会・講演会がときどき催されているが、それは良いアイデアだと思う。	522
平均.....	401

らB1へと、B1からそれ以下の階への階段の非連続性から生ずる問題である。これは、今となつては、ガイド等で補なつてゆくのが最善であろう。(20)は、特に混雑時に目だつものであろう。(28)で、BDSの煩わしさは、それ程感じていないところから考えると、エントランスの絶対的狭さが問題であろう。(19)と(22)は、相互に関連する。各種施設が各階に点在する為、利用者が頻繁にエレベーターを利用する。それゆえ、待ち時間が長くなるのである。一方では、地下部分へのエレベーターの開通を要請する声もあるが、その様な措置により、(22)の問題が顕在化する可能性がある。(30)については、フリー・アンサーを見ると設置場所の問題と同時に、設置数についての要望がたいへんに多い。すなわち増設を望む声である。しかし、同時に、混雑時にノート等の私物をコピーする者に対する取締り措置を希望する声もあることも銘記しなくてはならない。つまり、単なる増設が解決につながるとは限らないのである。これまであげたのは、マイナス部分だけであったが、決してそれだけではない。(13)(14)(15)などは、かなり良い評価を与えられている。すなわち総じて、閲覧席関係の居住性は、かなり良いと判断できるようである。しかしながら、フリー・アンサーでは、部分的な面で、いくつかの問題点があがっている。たとえば、「身長170cm以上になると机が低過ぎる」とか、「地下積層部分で、上階の足音がうるさい」とか、「地下書庫の空調が悪い」とか、「暑い日にクーラーが入らず、寒い日に入っている」とか、具体的な指摘が、かなりの数にのぼっている。これらは、特定な条件下での不満であるので定型的な質問の部分ではあらわれなかったものと思われるが、決して無視できない意見であろうとも思われる。

さて、次に(Ⅲ)をみてみよう。まず、「ガイド・利用案内」の所で、(7)の評価が低いが目だつ。これは、(Ⅱ)の部分で指摘をうけた、施設面でのわかりにくさと考え合わせると、かな

りシリアスな問題である。一方、これらと相互補完的である「人的援助」の面では、比較的高い指数を得ているのは“不幸中の幸い”とでも言うべきか。「規則・規定」では、(5)が特に高い。旧館時代と比較して大幅に増えた開架部分、および、入庫に際してのチェックの廃止等が、この評価の原因であろう。そして、残されたいくつかの制限が(26)の評価を生んでいるのであろう。(IV)は、どれも、新館になってから積極的に行なわれ始めた企画であり、これらは一様に歓迎されると考えられる。特に(17)は、(I)にある蔵書の豊富さに対する要望を満たす一つの手段となり得るであろう。

<ま と め>

さて、この様にして見てくると、少なくとも、今回のアンケートからは、全体的印象とうらはらの施設面での不都合という結果が数の上から現われたと言える。この問題は、今後、改善され得るものと、そうでないものとに分かれる。たとえ

ば、施設の点在、すなわち、サービス・フロアが全10層にもわたるといような問題は、三田の山上という立地条件を与えられ、キャパシティを決められた時点で、すでに“宿命”として授けられたものなのである。ゆえに、この種の問題については、いかに、ソフトの面で、すなわち、運用、利用ガイド、人的援助等で補なえるかが、今後の課題となるであろう。又、改善可能な面は、多方に意見を求めながら、慎重に改善計画を作り、実施してゆかねばならないであろう。同時に、このアンケートが、決してすべての利用者の声ではないことを忘れてはならない。たとえば、教職員は今回の対象には含まれていないし、また、今回の対象が、朝から昼ぐらいまでに入館した利用者であった為に、夜間の目録ホールの暗さや、レファレンス書棚の暗さについては、ほとんど指摘がない。その様な意味で、今後も、様々な機会に利用者からのフィード・バックを求め、この新館をよりよいシステムへと育てていくのが、情報センターの責務であると考える。

三田図書館情・報学会月例研究会

- 第27回 「OA in the library」 齊藤孝 7月17日
- 第28回 「目録データ・ベースの現状と展望」 上田修一(コーディネータ) 10月2日
- 第29回 「米国大学図書館における図書館利用教育」 58年3月上旬(予定)
- 第30回 「米国における目録データ・ベースの現状」 58年5月下旬(予定)
- 第31回 「出版情報ネットワークシステムの展開」 58年7月上旬(予定)

第29回以降の研究会の開催日程および会場は、三田図書館・情報学会会員には個別に通知するが、非会員の方々のためには、「図書館雑法」や新聞の催物情報に掲載を依頼する予定である。

三田図書館・情報学会は現在個人会員860名、団体350を擁する学術団体である。通常の活動は、学会誌 Library and Information Science (年刊)の発行、年3回の研究会の開催、橋本孝記念講演会(毎年11月)ならびに年次研究大会の開催などを行っている。研究会および講演会・研究大会へは非会員も自由に参加できる。会員加入希望は、慶應義塾大学図書館情報学科事務室(電話 03-453-4511 内線 3147)で常時受付ている。

Dr. フレッド・リードのこと

松村高夫

Dr. フレッド・リードは、完全に視力を失っている歴史家である。視界なき詩人や音楽家の名前を私達はすぐにでも幾人か挙げる事ができようが、歴史家の名前となるとそうはいかない。史料蒐集が不可欠な作業として要求され、小説家ともちがって、史料から離れることのできない足枷をはめられている歴史家にとって、視力を喪失していることは致命的にみえる。かれは、いかにして歴史家になりえたのだろうか。

かれは少年の頃失明したが、エディンバラ大学をでるとオクスフォードにすすみ、イギリス労働史の泰斗ヘンリー・ペリングのもとで博士論文を完成した。ペリング先生は78年春来日され、慶應大学で講演もされたが、若い研究者を育てる名手であるとの定評がある。ちなみに、一橋大学の都築忠七教授も、若き日にペリングの指導のもとにハインドマン研究で博士論文を完成している。フレッドは、イギリス独立労働党のキア・ハーディーに関する論文をまとめるとウォーリック大学の歴史学部のレクチャーとなり、イギリス近代社会運動史を講じながら研究を続け、78年に『キア・ハーディー』という著書を世に問うた。この本はハーディー研究のなかで最も高い水準をもつものとの評価を得ている。

私はウォーリック大学に着き、セミナーでフレッドに会ったときは、ただ驚くのみであった。博覧強記とはかれのためにある言葉のように思えた。セミナーでも、カタカタと点字を打ってノートしている。学生には鋭い質問を発し、適確な指導をしている。大学院のセミナーに突然投げこまれ、かれらが何を喋っているのかほとんどわからない状態の私をフレッドの存在そのものが秘かに激励した。視力を失ったフレッドがあれだけのことをやっているのだから、聴力喪失同然の私にも何か少しはできるだろう、いやしなければならぬ、そういう思いだった。やがて、フレッド一家とは家族ぐるみのつき合いとなった。

イギリス人の多くがそうであるように、フレッド

もまたよく人を招待する。夫人も視力を失っているが、美しいデコレーションケーキをつくって私達をよるこぼせるし、フレッドは客の好みに応じて食前酒をサービスする。あらかじめ様々のボトルを置く位置が決まっているので、全てがスムーズにいく。かれの書斎にはおびたしい数の録音テープがある。友人たちが史料を読んで吸き込んだテープである。フレッドはこれを聴きながら必要なところを点字でノートする。この忍耐強い作業をつづけてきたし、これからもつづけていくのである。

かれは一人でロンドンまでバスや列車を乗りついで史料蒐集にしばしばでかける。もちろん必要な史料があれば地方にもでかける。かれの家からロンドンのBLやPROまでは2時間位かかるが、この時は盲導犬は置いていく。そして、夕方には史料を蒐集して帰ってくるのだが、これを可能にしている一つは、図書館や文書館のサービスである。それを特別のではなく、ごく当り前のサービスとしていっているところに、イギリスの図書館や文書館の重厚な歴史が凝縮している。

そのうちに、もっと驚いたことがおこった。フレッドが、アフリカ経由でブラジルにでかけたのである。帰国後、かれはブラジルで

「見た」風景、人々の生活を長時間にわたって話してくれたが、その話の何と生々していたことか！途中立ち寄ったアフリカの情景描写も、私に「カサブランカ」を想いおこさせた。何故かれがこのように「見る」ことができたのか、今でも私はその謎の半分も解けていない。かれのブラジル行と前後して、ロンドンのフラワー・ショウで、視力喪失者は「色も形もわからない」という理由から入場お断り、と主催者が主張して社会問題になった。視力喪失者全国協会の代表でもあったフレッドは、その措置に抗議したが、私にもその措置の不当性は理解できるようになっていた。そして、フレッドが優れた歴史家になりえたのは、指導教授や友人に恵まれたことやイギリスの図書館のことがあるにせよ、最大のものは、かれの創造的発想力であると確信するに至った。かれは「見えない」が、「観える」のである。フレッドが視界なき歴史家であることはかれの著書のどこにも書かれていない。

(経済学部教授)



生みの苦しみ

立花 香代子

仕事柄、書物（主に雑誌であるが）のお世話になることが多く、図書館の恩恵に浴している一人であるが、いつも感心させられるのは、あの膨大な書籍の区分・整理である。私が利用するのは、限られた専門書のまたごく一部にすぎないが、まず間違いなく目的物に到達できるシステムは驚きでさえある。僅かな実験ノートの整理が不得手で、事ある毎に机上や本棚をかきまわしている我身を反省することしきりである。

さて、書物の利用法はいろいろあると思われるが、私の場合、はっきり2つに分けられる。読む場合と眺める場合である。仕事の上で、はっきりした目的があって論文を探して読む場合は、まず内容が第一で、実験方法や得られたデータをきびしく見、論文としての構成や表現などはあまり気にならない。一方、仕事関係のものでも学会誌や専門誌を全体に眺める場合があり、この場合は、まず視覚的な捉え方が優先する。タイトルを見て本文頁を開き、図・表など主なものチラッと眺めて興味湧いたら本文を読む。その場合、こちらの頭に抵抗なく入ってくるような文章は最後まで読み続けるが、表現が難解だったり、まわりくどかったりすると斜めに読みとばすか、途中でやめてしまう。その他小説をはじめ結構多種類の書物に触れているが、小説を除き、殆んどは眺める方に属する。いずれにしても、他人の文章はさらりと読み流してしまうが、いざ自分で書くとなると四苦八苦してしまう。研究論文などは一定の形式があるとはいうものの、読む人に理解してもらうためには表現力が要求されるのはいうまでもない。

私などは非常に世界が狭く、井の中のおたまじゃくし（蛙にもなれない）を自認しているのであるが、どうした風の吹きまわしか、雑誌の編集委員なるものを仰せつかってしまった。役割の理解もできぬまま何回かの編集会議に出席し、大先輩の傍で緊

張しながら必死で自分の分担をこなしている昨今は、陳腐な表現ながらまさに“生みの苦しみ”を味わわされている状態といえる。編集の専門家である出版社が企画・立案したものに、意見を述べる位のもんと思っていたら大違いで、編集委員がすべて企画・立案するのである。表紙のデザインから各種企画のレイアウトまで考えなければならない。専門誌とはいっても副読本としての気軽さを要求されるので、担当する方は“気重”なことが多い。表紙のデザインなど、普段は図書館の製本されたものを利用することが多いので、あまり気にしていなかったが、個々の表紙を比べてみて、改めて外国の雑誌に洗練されたデザインが多いのを感じた。色ひとつをとっても、微妙に色調が異なる上に、何よりも英字と



日本語（特に漢字）の持つ視覚的な差によるものと思われる。はじめて読者にアンケートを出し、どのような企画がよく読まれているか調査を行った。結果はほぼ予想通りであったが、本年号で廃止した企画についてのクレームが多かったのには編集委員一同、大いに反省させられ、次巻から新形式で復活させることになった。それに

しても発行部数は少ない雑誌であるが、熱心な読者が多いのに勇気づけられ、今までは苦しみ一方であったものが、ほんのちょっぴり“育ての楽しみ”ともいべきものが混入してきた。

編集委員の仕事をして、企画の他に埋め草的な雑文とトピックス的な小文、それに編集後記を各々年2回程度書くことがあり、これが結構負担になっている。臨床検査というのは生化学、血液、血清、細菌、病理など、患者の血液や組織を対象とする検体検査から心電図、脳波その他生理機能検査まで非常に範囲が広いので、専門外の論文の内容を理解することはとてもできないが、編集後記を書く必要上、すべてに目を通さなければならない。息抜きの雑文を書く時も、視野の狭さを痛感しているが、今まで殆んど気をつけることもなかったいろいろな面に目が行くようになったことで、少しは世界が広がったような気がしている。おたまじゃくしの尻尾がとれかかってきたのかもしれない。（医学部中検一部課長）

医学情報センターにおける
無断帯出防止装置の導入成績

宮崎 貞治
(医学情報センター)
情報サービス担当

はじめに

医学情報センターに、無断帯出防止装置(ブックディテクション・システム)が導入されたのは、1980年6月上旬であり、それから既に2年有余が経過した。この間、



幾つかの実施上の問題点が生じたので、これについて実情を報告したい。

I 効果

ブックディテクション・システムは、図書館の無断帯出を防止する為にアメリカで開発されたが、その効果の程については既に何例も報告されているように、著しいものがある⁽¹⁾⁽²⁾。医学情報センターにおいても、設置以来2度の蔵書点検の結果、明らかなように、その年度に紛失した図書の冊数が年毎に減少してきており、かなりの効果がみられる。(表1)

表1 開架単行本の新規紛失冊数

年・月	冊数
1981. 7	69
1982. 7	33

装置導入前は、利用者の入退館チェック・ポイントがなく、利用者は気ままにふるまうことができた。そのため一時、紛失図書が多く、カウンターはその苦情処理にかなりの労力をさかねばならなかった。しかし、この装置を出入口においておくと、貸出手続をせずに図書を持ち出そうとする人がチェック・ポイントを通るたびに、連続的に

大きな警戒音(アラーム)が鳴りひびき、バーが通路を塞ぐ仕組みになっている。また、この装置には、出口の所に通過者の人数を算えるカウンターがついており、その日の入館者数が自動的にわかるようになった。今まで入館者数がはっきりつかめなかったが、導入後は、57年9月3日現在で、411,192名と、まがりなりにも数字がでるようになった。

II 利用者の反応

設置から2年以上経過したが、この間、利用者の反応は、不満も反感もあまりなく、大体において平静であった。最初の頃は、好奇心から仕組を尋ねたり(医師が多い)中には、わざわざ試してみる人もいたが、最近ではそれもなく、利用者の間に、その存在がすっかり浸透してきたようである。

この間に鳴ったアラームの回数は、閲覧係にて記録し得た限りでは、表2のように2年間で142件である。2年目は前年に比較して、3分の1に減っている。アラームが鳴った時は、係員がおだやかに「手続きをされてない本を、お持ちではありませんか」と、声をかけるようにしているが、

表2 アラーム回数

原因	年 55.6.11~ 56.6.10	56.6.11~ 57.6.
無断持出	51	14
傘	20	5
原因不明	16	11
消磁ミス	14	2
三田の図書*	3	1
設置以前に貸出した図書**	4	0
他大学の図書	1	0
計	109	33

* 三田情報センターのブック・ディテクション装置導入前に、すでに三田の蔵書に磁気テープが付けられていたので、三田で貸出手続をすませた図書でも57年4月以前は消磁していない。

** やはり消磁していない。

それに対する反応は様々である。無断持出では、あわててうろたえる場合（うっかりしての人が多く）と、平然として少しも反省の色がみられない人、開き直る人などに分類される。

以下に閲覧系の記録からアラームの鳴った時の代表的な反応例をひろって紹介する。

- セーターの下に本を隠していた学生。ワナワナ震えながら、青ざめた顔で貸出の手続をして、無事退館。
- 恐慌状態で、本を身近かの机の下に隠し、館内を右往左往。(学生)
- 「あっ、急いでいて、手続き忘れた!」(学生)
- うろたえつつも、くやしげに舌打ちをして、貸出手続をする。(学生)
- 貸出手続をすませた本の中に、無断持出しの本をサンドイッチ式にはさんで出ようとした人。館員にではなく、そばの友人に盛んに弁解。(学生)
- 「この機械おかしいんじゃないの!」と怒っていたが、靴の中から図書館の本が出てきた。(医師)
- ぎょっとした顔をし、貸出カウンターへ引き返し、「あの、借りたいんですが」。(医師)
- ぶ然とした表情で、開かないパーをお腹でぐいぐい押す。手にしていた4冊のうち1冊が持ち出し禁の到着図書。(医師)
- 本を読みながら通過しようとする。通れないとわかると、入口の方から出ようとするが、やはり通れない。慌てず、急がず、依然として読みながら、カウンターへもどり、そこへ本を置いて、表情も変えず出ていく。(学生)
- 大きな索引(禁帯出)を2冊、アタッシュ・ケースに忍ばせて、持ち出そうとしたところで、ひっかかる。これを勇敢に幾度も試みるので、とうとう副所長に説諭される。(学外者)
- 慌てて、紙袋から本を取り出し、貸出手続をしようとしたが、学外者なので断わると、自分の会社で買うと言って、書名をメモして出ていく。(学外者)

これらの例は、今まで入退館のチェック・ポイントを相当自由に開放していたため、利用者に無断帯出の習慣がついてしまっていることを示している。たいていは、貸出手続が面倒なので、ちょっと持ち出して、用が済み次第、すぐに返すのであるが、なかには、つい医局の机の中にしまい忘れ、何年も返さないうちに、持ち出した本人がよそへ転出してしまい、わからずじまいになる本もかなりある。退館時のチェックは、図書館先進国といわれている米国においても、相当厳重になされている。あまり自由放任にすると、所在不明の図書が増加し、まじめな利用者は、せっかくカウンターへ問い合わせても、らちが明かず、自分の情報要求を満足させることができないため、段々と図書館への信頼を失っていくのである。

この意味で、ブック・ディテクション装置は、チェック・ポイントにおいて、利用者にわずらわしい思いをあまりさせることなく、相当の効果をあげることができる。

III 問題点

ブックディテクション・システムの導入以来、その効果と共に、幾つかの問題点も生じてきたので以下に述べてみたい。

1. 入消去作業に関して

入消去装置は、1つしかないので、貸出・返却が重なり、混雑した時などは、つい返却の方にスイッチを入れたまま貸出し、アラームを鳴らしてしまう消磁ミスが、発生し易くなる。これは入消去を1つのスイッチで行うので生じるが、入消去に伴っては、赤ランプが点滅し、「ゴト」と音がするので、消去する時は、必ずそのランプが消えるのを見届け、音がするのを確認して貸出するようにすれば防げる。又、非常に厚い本の場合、消えない場合があるが、その時には、本をのせたまま、光電管の穴を、手でふさぐと大丈夫である。反面磁気を入れる作業は、ミスが少ないようであるが、書架に戻す前には、必ず、磁気が入っているかを確認してからにしないと、ブックディテク

ションの役目を果さない事になるので、注意を怠れない。新人はどうしても消磁ミスが多くなるので、人の入替りがある場合、徹底した教育が必要である。

このように、入消去作業は、装置に本を横すべりさせるだけの、単純なものではあるが、確実性を増す為に注意をしなければならないし、又、カウンターの混雑時には扱う冊数も多く、係員にとってはかなりの負担になる。

2. カセットテープとディテクション

ブックディテクション・システムは、入消去装置で、磁気を点滅させるので、カセットテープをこれにかけてしまうと、音がとんだり、内容の音声が意味不明になったりするので、絶対に装置にかけないようにしなくてはならない。医学情報センターでは、カセットテープ類が、雑誌や本と、貸出手続きが同じで、ついすっかりと磁気消去にかけて今迄に3本程、カセットテープを駄目にしてるので、今では特に注意をしている。

3. 原因不明と傘によるアラーム

アラームが鳴った回数の中で、原因がわからないものが、27件もある。この中には、2度目は大丈夫だった場合が5回あり、何も持っていないのに鳴った場合もかなりあり、又荷物を持っている場合でも、カバンなど、中を開けてもらい調べても原因がわからない場合も多かった。更にブックディテクションテープと同じ材料を持つ傘(ある特定のメーカーのもの)によるアラームも25回と多く、又、天気の良い日など、装置が、「ゴトゴト」と続けて鳴る場合(入消去にかけた時と同じ音)もかなりある。これらは、装置が敏感なため、装置の回りの環境に、影響を受けるかららしいが、はっきりした理由は、未だわからない。

4. 機械のトラブル

ブックディテクション・システムの調子が悪くて、修繕を頼んだことが、今迄8回程あるがその内訳は、出入口のバーのゆるみが4回、入消去装置の「ゴトゴト」音がひどくて、感度調整をしたのが3回で、残りの1回が、入消去装置の故障に

よる入消去不能であった。その都度、即日に修復したので、大きな事故もなくここまで来た。

おわりに

これまで述べてきたように、ブックディテクション・システムは、図書紛失の減少に効果をもたらした。しかし、技術上の問題点も若干残っており、今後の課題となっている。

参 考 文 献

- (1) 山根 京, 堀江幸司: ブックディテクション・システムの設置から2年を経過して(報告)一蔵書点検の結果を中心として一 医学図書館27(4): p.197-203 1980.
- (2) 佐藤淑子: ブックディテクション・システム一蔵書点検の結果をふまえて一 丸善ライブラリーニュース No.116: p.xv 1980.

Circulation system の機械化

藤 井 裕 子

西 山 知 子

(日吉情報センター
パブリック・サービス課)

はじめに

この4月から、日吉図書館では、電算機(MEM-OLEX K-5: TOSBAC DP-6)を導入。端末機2台をカウンター内に、事務室には本体、プリンター、端末機1台を設置し



た。

貸出・返却業務のみならず、各種の業務を迅速に処理することが可能となり、サービスの向上とともに利用者の増大が確保された。

それまで約1年間、データシート作成、機械可読用バーコードの貼付作業が行われ、日常業

務とともにスタッフ、アルバイトがこれらにあたった。バーコードの貼付位置については、日常の貸出業務や蔵書点検作業等の合理性、ラベルの汚・破損防止などを考慮し決定した。

以下、電算化によるカウンター業務についてのみ述べてみる。

(1) 貸出プログラム

利用券（貸出券）と図書のバーコードを端末機に附属するライトペンでなぞるだけ、又は、キー入力することにより、貸出手続きが終了となる。

まず、利用券をペンでなぞり利用者ファイルを抽出し、図書の入力の可否を確認する。利用者もしくは、貸出図書に何らかの問題がある場合、アラームにより指示され、その指示に従って Yes or No で確認をとり、次の入力が可能となる。

表示内容について、例えば、

① 延滞図書が未返却にもかかわらず手続きにくる。

—延滞図書アリ、貸出シマスカ？(Y/N)—

② 延滞累計により貸出停止期間中である。
—罰則適用中、貸出シマスカ？(Y/N)—

③ 再発行の利用券で確認が必要である。
—利用券発行2枚、確認—

④ 貸出冊数の制限を超える。
—冊数オーバー、貸出シマスカ？(Y/N)—

など、これらの他にもその状況により判断され、処理が成される。

通常の貸出においては、画面（ディスプレイ）をみることなく、スピーディに行われている。

利用者にとっての最大のメリットは、面倒な手続き（貸出券等への記入）が省略されたことである。

(2) 返却プログラム

返却図書のバーコードをライトペンでなぞるだけ。又はキー入力することにより、利用者ファイルから記録が消去され、返却手続きが終了となる。

返却図書に対して問題がある場合、アラームにより指示され、確認をとる。例えば、

① 予約図書である。

② 延滞図書である。罰則扱いするか？

③ 罰則扱いした延滞者の延滞累計、貸出停止期限の確認。

などが表示される。

利用者は、返却図書を所定の場所に置いていくだけで、手続きは終了する。延滞者に対するの罰則は、延滞日数の累計が一定数になると貸出停止としている。

(3) 図書に関する問い合わせプログラム

図書の登録番号（バーコード）又は請求記号を入力することにより、問い合わせができる。

① 図書登録番号・請求記号

② 保管場所（2階・地下書庫など）

③ 区分（書架にある・貸出中・修理製本中・禁帯出など）

④ 予約の有無・予約者の人数

⑤ 予約の受付

⑥ 貸出中の場合、利用者と返却期限

⑦ 複本の有無・複本の①～⑥について

これらの表示は、利用者からの多くの問い合わせを一度に解決している。

問い合わせとは別に、このプログラムにより、図書に関する登録・変更・除籍などの作業ができる。

複本についても、同じように一画面上で処理が可能となっている。

(4) 利用者に関する問い合わせプログラム

利用者番号、又は氏名を入力することにより、問い合わせができる。

① 利用者番号・氏名

② 貸出冊数と図書番号・返却期限

③ 延滞累計

④ 罰則期限

⑤ 利用券発行枚数

これらは、貸出プログラムにおいて利用者番号を入力した時と同じ表示がされる。ここでは、氏名の登録・変更・利用者個人のファイルとしての券発行枚数の記録・延滞累計、罰則期限の調整など、事務的な処理と管理をしている。

(5) 督促について

随時、延滞者リストを打ち出すことができるようになった。

- ① 利用者番号・氏名
- ② 貸出図書番号・請求記号・返却期限

これらがプリントされた、利用者コード別(学部別)のリストと請求記号順のリストで、定期的な督促が容易になり、日吉在学生に対しては、掲示板を利用して、リストの張り出しにより督促を行っている。

(6) 統計について

月々の利用統計は、機械的に処理される。同時に毎日の利用状況も記録され、リストに打ち出している。

- ① 利用者コード別貸出人数・冊数
- ② 月の開館日数
- ③ 最高と最低の貸出人数・冊数・その日時
- ④ 月の平均貸出人数・冊数

その他に、時間帯別の貸出の記録をしている。年間を通しての統計として、利用者コード別(日吉学生・他キャンパス学生・院生・諸学校生徒・通教生・教職員など)の利用状況、利用頻度の高い図書の打ち出しなどを予定している。

以上のプログラムをカウンター内で扱い、すでに5カ月を経過した。

月々の利用統計は、昨年度と比較対照すると利用者数・貸出冊数・入館者数の増加率に目を見張るものがある。例年、新年度から前期末試験期にかけて利用は徐々に増加しているが、今年度は、新年度開始と同時に急速な増加を示している。

この利用者増加の要素として、新入生に対して学籍番号と同じバーコードを付した利用券を、学生証とともに交付していること。また、他キャンパス学生の利用については、登録することにより利用者番号が与えられ、いずれも卒業まで(在籍中)は図書の利用が簡単に受けられるようになったことなどが考えられる。

この業務に携わるスタッフは、導入後1カ月以内には端末機を自由に操ることが可能となり、貸出・返却それぞれのステーションに1名で対処できるようになった。以前は、利用者が増加してくると全スタッフが貸出・返却処理だけに追われ、それ以上のサービスは望めない状態であった。現在は、恒常的にレファレンスサービスを行う人員の確保が可能となった。

電算機導入による貸出システムは、利用者到手続きの簡素化・スピード化をもたらしただけでなく、その他のサービスの提供をも可能にした。

今後、増大する利用者に対して、機械で打ち出し可能な分類別蔵書構成、回転率など各種データをも参考にし、学習図書館としてのより一層のサービスの充実をめざしたい。

参考<1> 電算機導入前(56年度)と導入後(57年度)の比較

i) 利用者数及びその増加率

年度 月	56 (人)	57 (人)	増加率(%)
4	2,096	2,430	16.0
5	3,747	4,666	24.5
6	4,520	6,269	38.7
7	3,376	5,023	48.8
8	684	835	22.1

ii) 各月の1日平均利用者数(最高・最低)

年度 月	56			57		
	平均	最高	最低	平均	最高	最低
4	95	174	10	114	187	30
5	156	218	37	192	299	10
6	174	253	98	238	347	97
7	125	197	62	191	314	107
8	34	115	6	45	145	16

iii) 貸出冊数及びその増加率

年度 月	56 (冊)	57 (冊)	増加率(%)
4	2,723	3,274	20.2
5	4,921	6,238	26.8
6	5,971	8,483	42.1
7	4,970	7,756	56.1
8	1,086	1,475	35.8

iv) 各月の1日平均貸出冊数(最高・最低)

年度 月	56			57		
	平均	最高	最低	平均	最高	最低
4	124	211	11	154	242	47
5	204	272	47	256	407	14
6	230	345	131	322	480	129
7	184	275	97	295	449	180
8	54	177	8	80	260	33

v) 入館者数

年度 月	56 (人)				57 (人)				増加率 (%)
	延数	平均	最高	最低	延数	平均	最高	最低	
4					38,461	1,831	2,557	610	
5					51,995	2,163	3,017	423	
6	31,052*	2,588	3,189	1,132	65,317	2,512	3,357	895	
7	52,817	1,956	3,580	475	60,236	2,317	3,986	798	14.0
8	8,606	430	1,089	95	9,314	517	1,459	152	8.2

* 56.6.17からカウント・アイ使用

<2> 57年度貸出券交付数(57.8末現在)

利用者分類	枚数
日吉学生	8,071
他キャンパス学生	1,978
院生	52
諸学校生徒	112
教職員	119
合計	10,332

慶應義塾大学文学部図書館・情報学科創立30年

同学科は昭和26年4月「図書館学科」として創設された。今年で創立以来31年を経たことになる。三田の新図書館を待って今年11月13日(土)に記念式典を挙行了した。

同学科は、創立以来約1,500名の卒業生を送り出し、その多くがわが国および海外の図書館界で活躍している。現在、修士および博士課程の研究科が併設され、学部120名、大学院に20名が在学している。

創立記念行事として、式典の他に、三田図書館・情報学会の年次研究大会、記念講演会、新図書館見学会、祝賀同窓会が開かれ、約250名の卒業生、図書館関係者が出席した。なお記念講演では、沢本孝久三田図書館・情報学会会長による「学科創立の前後」と高鳥正夫法学部教授、前研究・教育情報センター所長による「塾の図書館・情報学科と大学図書館」の講演があった。

新図書館閲覧課にて

原田 いづみ

初めて図書館を見学した時、建物や設備の美しさや優雅な雰囲気が大変圧倒されました。明るく解放的で、こんな素敵な所でこれから働くのかと期待で胸踊らせた次第です。しかも配属は閲覧課。冗談で言っていた「図書館の顔」に本当になるのです。立派な入れ物にふさわしい中味になりたいと思いました。

しかし、いざ開館すると大変な忙しさで、何を考える余裕もなく、必死に動きまわっているだけで毎日がどんどん過ぎていきました。わからない事ばかりで、スタッフマニュアルと首っ引きでつかえつかえ返事をする有様です。目がまわりそう、頭は過熱気味、いろいろな事を覚えねば、勉強せねば、不安、どうしよう、でたらめばかりやってしまった……。考える事は全てこんな調子でした。やがて不安が嵩じて、対利用者恐怖症に落ち入ってしまいました。人が近づいて来るだけでギクッとするのです。出納が間違っていると頭から怒鳴られてすくんだ事もありました。前の図書館と比較した質問も苦手です。英語で話しかけると、殆ど身振り手振りで返事をします。受付で、見学者、友達と一緒に来た人、他大学の学生、一般外来等に対する時、特に気を使います。断わったり入れたり、規準が曖昧で、臨機応変に対処せねばなりません。断わる度に考え込んでしまいます。

受付にいてもう1つ困るのは、ディテクションが鳴った時です。本当に無断で本を持ち出す場合と傘などが鳴る場合とあります。初めて無断持ち出しに出会った時、一緒にカウンターについていた先輩の接し方到大変感動しました。しっかり落ち着いて、パインダーの間の本をめざとくみつけ、手続きはお済みですか云々、静かに対話し、登録と貸出しを指示していました。そして私がすごいですね、ということ、今の人はほんのでき心という感じで、反省して

いたから特にきつくいう必要はなかった、とおっしゃるのです。相手を観察し、それにあわせて対応するのか、とさらに感動しました。私も早くきちんとした応対ができるようになりたいと、その時、思いました。

人が恐い仕事ですが、人が楽しい仕事でもありません。実に様々な人間がいます。学生証を見せる行為1つとっても、ズイッとつき出していく人、チラッと翻えすだけの人、なぜか高く捧げ持つ人、手の陰で隠すようにしている人、定期を見せる人、誰かの写真を出す人、面倒臭がって不気嫌になる人、必ず挨拶をしてくれる人、こちらが全く眼中にない人……。私が同じように話してもいろいろな反応がある

のです。同時に、人が同じように話しかけてきても、自分自身の状態によって違った反応をする事もあります。自分をも含めて、人間というものなんて面白いのだろうと再認識しました。

先日カウンターで、利用者に対して本気で腹を立ててしまいました。こんなことは初めてでした。以前の私だったら怒らなかったかもしれません。何度も言葉を変えて説明してもちっとも通じなくて、

ムカーツとなった所で、隣の先輩が助け舟を出してくれました。2言3言ですぐ相手は納得しました。感動よりショックが大きく、悔しくてたまりませんでした。なぜ私の言葉は通じないの？ 経験の差だよ、と言われました。覚えなければならない事はたくさんあります。規則や図書館のしくみについて、他の階の事も、さらに資料についてもっと知りたいし、分類や所蔵し得る図書の傾向といった事まで自分のものにしたいなど考えていました。が、それ以上に、毎日の人との接触から得た経験を1つ1つ大切に積みあげていき、それを土台として、テキパキと気持ち良く利用者に接したいと思います。イライラや不気嫌を表に出さないように、いつでもはりきった姿をおみせしよう。閲覧課で、先輩の生き生きとした姿を見たり、利用者や接したりする中から、入れ物にふさわしい中味をこんな風に考えました。

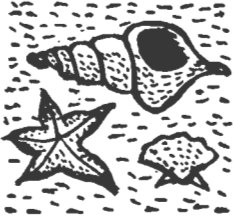
(三田情報センター閲覧課)



IMIC 10周年雑感

高田 宜美

((財)国際医学情報センター)



昭和57年5月21日、前日の激しい雨が嘘のようにあがり、緑が一段と映える国際文化会館においてIMIC10周年を祝う記念式典が盛大に行なわれた。当日の祝賀会に参加された方は約140名で

あった。受付の要員として招待者を迎えていた著者はちょうど10年前の昭和47年4月19日、ホテル・ニューオータニで開催されたIMIC設立披露式典の日のことを思い起し、紆余曲折しながら設立後10年経過したのかと、いささか感慨深いものがあった。

設立8年目ぐらいから、10周年を一つの区切りとして記念行事を行なおうではないかと様々な提案が内部でなされる一方、まだ華々しい行事を行なうには時期尚早ではないかという意見もあったが、やはり今後のためにも一つの契機として、内外の人にこの間ご協力下さった事に感謝の意を伝え、今後さらに飛躍するためいくつかの企画を行なうことになった。記念行事としては、5月の設立記念式典、東京、大阪におけるセミナーおよび公開講座、出版物である“あいみっく”特集号の出版などがその主なものである。

周知の通り、IMICは外山敏夫常務理事を設立発起人代表として、慶應義塾での1年有余の準備段階を経て、昭和47年4月1日に厚生省、文部省の認可で正式に設立された。設立趣旨は国内外の医学研究者のために、幅広く医学情報を提供することにあった。といっても設立母体である慶應義塾の医学情報センターが、一大学図書館としてはとても処理しきれない規模を持っていたため、分離せざるを得ない状況にあったようである。

どこの組織でも、分離された組織はその双方で

それぞれの存在意義を始めとし、財政的にも職員の構成においても、二つの機関として独立して運営されるには数年間の時間的猶予が必要と思われるが、医学情報センターとIMICの関係においてもまさに同じ状態を辿ってきたといえる。

今年の3月、日本と西独の科学技術協力協定に基づいて開催された日独科学技術協定、情報とドクメンテーション部会で、ハノーバ工科大学図書館長がIMICと医学情報センターとの関係と同じ様な経緯で、内外の要請で図書館から技術情報センターが設立され、組織が分離されたことについて講演された。館長はセンター長を兼任し、情報センターは同じキャンパス内に設けられ、その後、再び図書館に同居することになるが、やがて、双方の組織が成長するにつれ、手狭になると同時にサービス内容も対象者も変り、再び別の建物で近い場所に情報センターが位置するのが良いのではないかという考えができて目下検討中であるが、多分、実施されるであろうと言っておられた。医学情報センターとIMICの関係もこれに近いのではないかと思いつつ講演を聴いていた。

設立後1年間は双方の職員の区分がまだあいまいで、医学情報センターの総務の人々がIMICの総務的事項を扱っていたが、約1年後に組織形態を分けるようになり、2名の医学情報センター職員がIMICに移籍した。この移行期には様々な困難な事が生じた。IMICが殆んどすべての情報サービスを引き継いだため、医学情報センターとしては何か仕事を失った様な感じにとらわれたとしても心理的には当然と思われ、また、IMICにとっても各部門の責任者であった経験者が医学情報センターに残り、何をするにしても、彼等経験者の方が頼りになるという局面が何度もあったようであった。

設立直後は日本の中核的な医学情報センターを創り出すという意気込みがあったが、3・4年目は財政的には苦しい時期を過した。世にいう財団法人またはFoundationという響きは、運営のための基金を持ち、それによって世の中のために還元していく事業を行うという感じがするが、IM

IMICの場合は、まさに自転車操業で年度末の3月に借金を一応返済し、年度始めの4月に再び借入するという状態が昭和50年度まで続いた。

既述した通り、医学情報センターとの関係は決してスムーズとはいえなかった。設立後2・3年間の混乱は当然予想されたことであるが、IMICの職員としては全てのことに對して医学情報センターや情報センター本部の同意が得られないと何事も実行に移せないのではないかという極端な感情に左右された時期もあった。とりわけ、複写事業に供する資料の利用をめぐる意見が分れたため、複写サービスは行わず、調査研究を主体とする一種のシンクタンク機関になった方が良いのではないかという意見も一時は真剣に論じられた。また外部の理事の中には、このままの関係ではいつまでも大学の付属機関としてしか発展せず、名前の通り国際的な医学情報センターとしては機能しないだろうという意見もあった。が、一方、外部の人に会えば医学情報センターから出来た財団といった方が話しは通じ易く、時には従来の北里記念医学図書館と区別がつかない人も多かった。IMICを認識してもらうためには、慶應の中にある情報センターといった方が信用される場合も多くあった。この傾向は今も強く残っている。これは設立の成り立ちからいっても当然で、IMICとしては、医学医療情報の提供の面では今までの図書館の枠を破る新しい形態で運営されていた医学情報センター、および伝統ある医学部の名前に恥じない活動をしていかなければならないと思う。IMICの業務の中には、医学情報センターの職員や機能は言うに及ばず、医学部の先生方に、公開講座の講師、翻訳のリバイザー、ダイヤル・アクセス(Dial Access)サービスの執筆、その他各種プロジェクトに参加していただいで運営しているものが多くある。この様に、大学図書館にない機能を果していくためには、医学情報センターや医学部の協力なしには、円滑な業務の運営は困難といえるだろう。

ここでIMICの経営状態を最も左右した複写サービスについて振り返ってみたいと思う。折から経営危機に直面し、もう一度複写事業の見直し

を行おうとする気運が見られ、様々な討議を重ねた後、人事も刷新して積極的に取り組む事になった。今まで同じ場所(1階の閲覧室)で受付けていたのを、新たにIMIC用の受付を地下に設け、利用者が書庫に入り必要な雑誌をカウンターまで持ってくる方式をやめ、申込用紙に書誌事項を書きこんで提出すれば、職員が資料を取り出すという出納式に変更した。昭和52年10月のことである。これは社会のニーズの変化から日増しに増大するコピー依頼件数をさばくためと、そのために書庫内に外部の人が多く入り、研究者に迷惑をかけるのを防ぐことを目的としていた。このことは、両機関の接点ともいべき双方の総務担当者を中心とする総務会で検討され、情報センター本部の同意を得て遂行されたと記憶している。変更後は利用者自身が資料を取り出していたのを職員やアルバイトがやることになり、新たに多くのアルバイトが採用された。当初は体制の変化で利用者離れが懸念されたが、時間が経過するにつれ、杞憂にすぎないことが立証された。その後もコピーの需要は、IMIC内の処理体制の改善と社会的ニーズの変化(薬事法の改正による製薬会社の営業活動の変更、オンライン検索の普及による依頼の増加等)とあいまって激増し続け、結局このことが今日のIMICの財政的安定をもたらしたといえよう。しかしながらコピーの激増はいくら出納式にしたとしても医学情報センターに別の影響を与えるようになってしまった。即ち、IMICの出納業務が四六時中行われるため、書庫内が常にざわついていることと、資料が中々書棚に戻らないという状況を産む結果となった。医学情報センターとIMICはこの問題を解消すべく複写問題検討会を組織し、半年間にわたる協議の結果、本年4月からIMICによる夜間複写業務を開始することになった。医学情報センターの閉館後、夜11時まで複写業務を行うもので、開館している間は本来の図書館の持つべき条件として、出来るだけ静かな状態を保とうとするものである。夜間体制も約半年経過し、軌道に乗り出している。

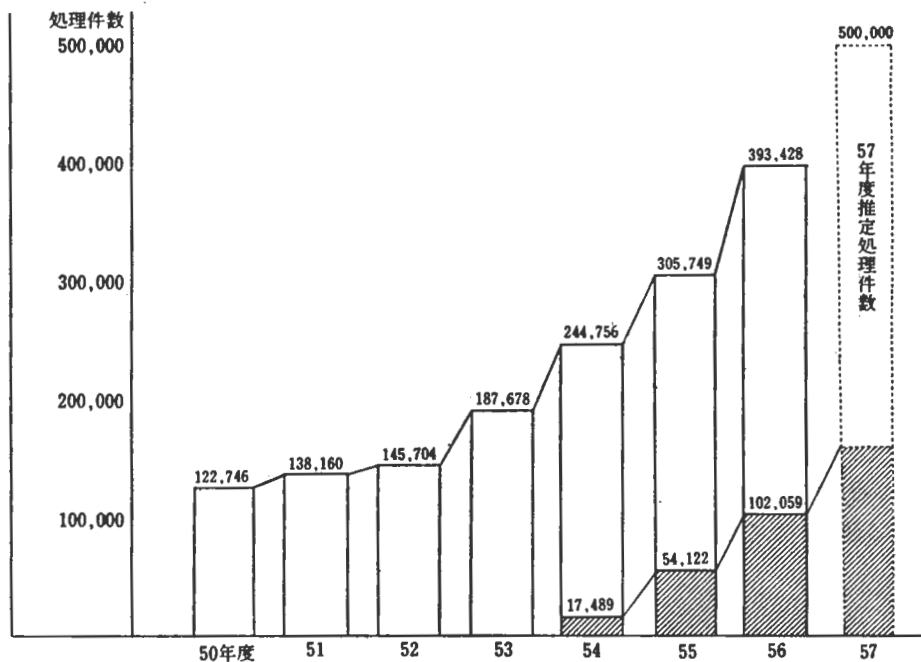
一方、慶應義塾との関係では、医学情報センタ

一の資料利用と、センター内の地下部分80坪を賃借する契約が塾長とIMIC理事長の間でかわされている。また、50年11月に初代橋本理事長が逝去され、翌年3月に設立以前から引き続き活躍されていた津田常務理事が図書館情報学科の教授に専念されるため退職され、役員をはじめとする人事が大幅に変更された。51年5月に現牛場理事長が選出され、同年10月には慶應義塾より事務局長職の outgoing を迎えることになった。赤字財政を黒字に転換すべく経費削減が行われ、職員にとっては辛い出来事であった希望退職の募集もこの時期に行われた。しかし、慶應義塾との関係も適度に連絡が保たれ赤字も解消されたが、尚、職員の精神的動揺も激しく、業務の進展も滞りがちになり、53年11月には再度慶應義塾より業務部長職の outgoing をあおぐことになった。これを契機に、それまで死蔵されていたIMIC所蔵の雑誌を製本し、移動式書架を業務部内に設置し、複写への活用を図り、併せて利用度の高いコア・ジャーナルを購入する方法を採るようになった。以来、予算も少しずつ増え、所蔵雑誌も多くなり、56年12月、小規

模ではあるが大京町21番地の田中ビルにIMICライブラリーが設置されるまでになった。現在、医学・医療関係、および情報学関係を含めると、約1,200誌を受け入れているが、その殆んどがこのライブラリーに配架されている。ちなみに50年度以降の複写の推移とIMIC所蔵資料を複写に活用ようになった54年度以降の推移をみると第1図の通りである。出納式を完全に実施した昭和53年度以降の複写の急増加がよく分ると同時に、54年度からIMIC独自の資料による複写も確実にその量を伸ばしていることがわかる。今後、益々業務に必要な資料が整備され医学情報センターへの資料利用の依存を軽減するよう努力していくことが望まれる。

以上、医学情報センターとのかかわりから複写や資料のことを中心に推移を述べてきたが、現組織について少しふれてみたい(第2図参照)。個々の業務については紙面の都合で割愛するが、あいみっく10周年特集号に各業務の推移や今後の問題について詳しく書かれているので、関心のある方は是非読んでいただきたいと思う。

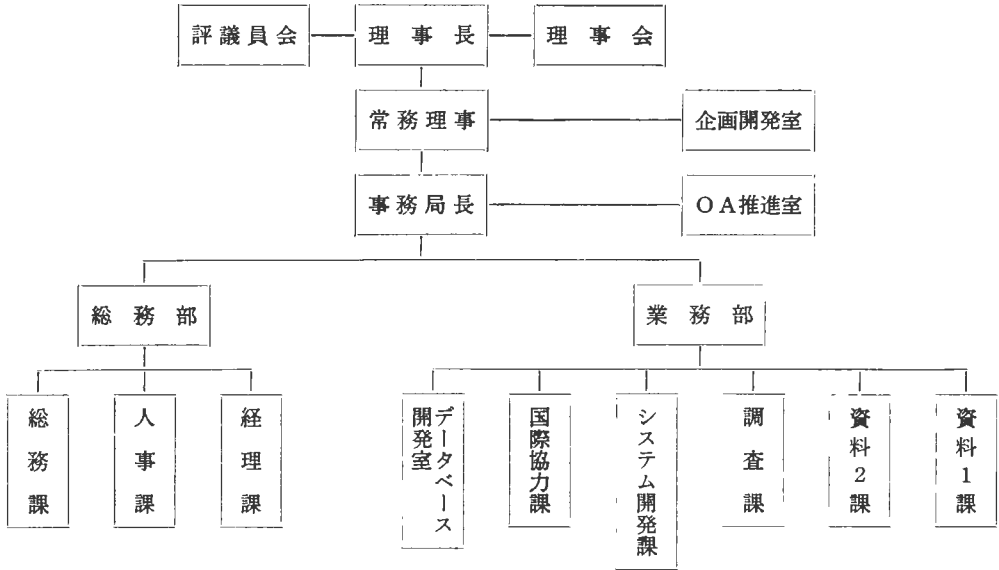
図1 50年度～57年度における外部手配分を除く複写処理件数の推移



(斜線部分はIMIC所蔵資料による処理件数)

図 2 組 織 図

57. 6. 1



57年4月1日現在、常勤役員3名，職員59名，嘱託2名，アルバイト約50名

本年7月には、従来のデータベース準備室をデータベース開発室と改称し、設立当初から財政的、人為的な理由からプランは作られても実行に移せず悲願であった医学分野のデータベース作成を行うことになった。医学情報センターから引き継いだ米国国立医学図書館へ日本の医学文献を索引して送付する MEDLARS プログラムの終了後、やはり米国の国立がん研究所との5年間にわたる日本のがん文献を International Cancer Research Data Bank (ICRDB) へ入力させる受託業務を行なった。残念なことに米国の事情で昨年11月で契約が終了したのを機に、この経験を十分に生かし、日本のがん分野のデータベースを開発することになった。海外へ英語で日本の学術情報を送ることを推進している文部省の計画と合致して、科学研究費を得て、目下詳細設計の作成に検討が重ねられている段階である。

財政的には一応安定した状態ではあるが、全職員が同居できる建物がなく6か所に分散し、従っ

て、時としてコミュニケーション不足を生じることもあり、また、一時期、新入職員の採用を見合わせた結果、職員の高齢化も進み人事の刷新も行い難くなっている状況など、今後解決すべき問題が山積している。

幸い数年前より独自の建物を建築すべく建物引当金を決算毎に積立てることができるようになっている。書庫が手狭になっている医学情報センターのためにも、より早い機会に建物の建築が実現されることが望まれている。

医学の日進月歩の状態、また情報を扱う各種機器の目ざましい日々の進歩の中で、医学医療情報を扱う専門センターとして、設立趣旨にそった業務の展開が必要である。世の中の厳しい状況に打ち勝つため、大学の組織とは違った一つの企業としての経営のとり組み方が求められている。公益的業務の中にも収益性、合理的経営が追求されていかなければならないと思う。

慶應義塾図書館(新館)に関する書誌

<1977>

“新図書館・研究室棟(三田)建設調査委員会の答申について” **KULIC** No. 10, p. 13.

“新図書館・研究室棟を新設” **慶應塾生新聞** No. 96 (11月10日), p. 1.

“新図書館建設へ構想進む” **慶應キャンパス** (10月20日), p. 2.

高鳥正夫 “動き始めた新図書館構想” **慶應義塾大学報** No. 82, p. 4-5.

<1978>

“新しいシンボル誕生 56年完成へ新図書館建設本格化” **慶應キャンパス** (11月20日)。

“第2校舎跡に新図書館建設へ” **慶應義塾新聞** No. 236 (12月15日), p. 1.

“建設予定地は第二校舎跡に一学生の利用を第一に一新図書館第一次案発表される” **慶應塾生新聞** No. 107 (11月10日), p. 2.

“設計者榎文彦君に聴く 新図書館の青写真” 榎文彦 聴く人 唐木冨和 **慶應義塾大学報** No. 97, p. 4-5.

“新図書館構想 日照権で白紙に” **慶應キャンパス** (5月20日)。

“新図書館構想まとまる 第一次案” **慶應キャンパス** (11月20日)。

“新図書館新設が決定” **慶應塾生新聞** No. 100 (4月10日), p. 1.

高鳥正夫 “新図書館の構想とその具体化” **塾友** No. 263, p. 8-11.

<1979>

榎文彦 “設計者のねらい<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 12, p. 4-10.

“三田・新図書館建設工事 着工は三田祭以前” **慶應義塾新聞** No. 241 (6月1日), p. 1.

中島紘一 “新図書館のプランニング準備段階から実施設計まで—<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 12, p. 11-8.

“労組「移転条件」に難色 着工時期に影響か 新図書館問題” **慶應義塾新聞** No. 237 (1月15日), p. 1.

“新図書館建設案に思うこと” **慶應義塾新聞** No. 237 (1月15日), p. 2.

“新図書館の建設と大学図書館の役割<座談会>” 出席者：高鳥正夫 大山道広 高宮利行 **慶應義塾大学報** No. 104, p. 2-5.

“新図書館来年2月工事着工へ” **慶應義塾新聞** No. 244 (9月14日), p. 1.

“新図書館来年3月着工へ” **慶應塾生新聞** No. 116 (10月10日), p. 1.

“新図書館各階配置決まる 学生の利用を最優先” **慶應塾生新聞** No. 120 (12月10日), p. 1.

曾根幸一 “新図書館の設計者—建築家 榎文彦君<塾員 who's who>” **三田評論** No. 790, p. 70-1.

“対談 構想なった新図書館” 榎文彦 高鳥正夫 **慶應義塾大学報** No. 107, p. 4-5.

高鳥正夫 “新図書館への期待<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 12, p. 1-3.

<1980>

“第2校舎解体始まる 近々新図書館着工へ” **慶應義塾新聞** No. 248 (1月1日), p. 1.

“新図書館着工へ” **三田ジャーナル** No. 69, p. 1.

高鳥正夫 “義塾における図書館サービスの発展” **塾友** No. 282, p. 8-14.

高鳥正夫 “情報センター発足からの10年間” **KULIC** No. 13, p. 1-9.

<1981>

細野公男 “新図書館と図書館・情報学教育”

KULIC No. 15, p. 26-8.

“教養図書2万冊を収容 新図書館来年4月にオープン” **慶応キャンパス** No. 93 (11月20日)。

宮木さえみ “新図書館総合資料室への期待くスタッフルーム” **KULIC** No. 15, p. 17.

中島紘一 “新図書館の新しい機能” **慶應義塾大学報** No. 127, p. 14.

中島紘一 “新図書館の完成を控えて” **塾監局紀要** No. 8, p. 36-43.

中村洸 “新図書館にのぞむ法学部図書委員長の見解<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 14, p. 7-9.

“Outline of the New Library at KEIO—To be opened Mid-April” **Mita Campus**, Vol. 38 No. 3 (November), p. 7.

“ペンキで「学斗勝利」左翼, 新図書館に落書き” **慶応キャンパス** (12月5日)。

関口操 “新図書館利用 サービスにのぞむ<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 14, p. 9-10.

“新図書館の利用について” **KULIC** No. 15, p. 1-3.

“新図書館来年開館—三田の学問の中核に—” **慶應塾生新聞** No. 133 (2月10日), p. 2.

高宮利行 “文学部の考え方<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 14, p. 5.

高鳥正夫 “完成近い三田の新図書館” **塾友** No. 293, p. 8-11.

田村茂 “新図書館総合資料室について<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 14, p. 11-2.

寺尾誠 “図書館におけるソフト・サービス<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 14, p. 6-7.

“図書・資料の再配置について<三田の新図書館建設計画>” **KULIC** No. 14, p. 2-4.

<1982>

安西郁夫 “慶應義塾図書館<新館紹介>” **図書館雑誌** Vol. 76 No. 9, p. 570.

安西郁夫 “慶應義塾図書館と図書館・情報学科の新しい歩み” **図書館雑誌** Vol. 76 No. 5, p. 253-4.

安西郁夫 “新図書館の利用法” **慶應義塾大学報** No. 131, p. 4.

“〔美術の“現場”〕でご紹介したジェニファー・バートレット その作品が慶大図書館に入るまで” **流行通信** No. 223, p. 155.

“注目を惹いた新図書館入口の壁画” **三田評論** No. 825, p. 134.

“コールド・ドラフト対策のためのパネルヒーター内蔵のブラインド・ボックス 慶應義塾図書館・新館/榎総合計画事務所<今日のディテール>” **ディテール** No. 73, p. 54-5.

ヒサクニヒコ(イラスト) “新図書館完成” **慶應義塾大学報** No. 130, p. 1.

菱山健一郎 “慶應義塾図書館・新館見学会(地区合同)” **専門図書館協議会関東地区協議会ニュースレター** No. 59, p. 3-5.

飯田善国 “Petals of Knowledge” について” **三田評論** No. 823, p. 62-3.

“慶大に新図書館<キャンパスガイド>” **読売新聞** (2月15日夕刊), p. 6.

“慶應義塾新図書館 あすオープン” **日刊建設通信** (4月7日), p. 6.

“慶應義塾図書館<新館紹介>” **大学図書館協力ニュース** Vol. 2 No. 5, p. 7.

“慶應義塾図書館完成 あすオープン” **日刊建設工業新聞** (4月7日), p. 6.

“慶應義塾図書館新館 設計:榎総合計画事務所” **インテリア** No. 279, p. 75-93.

“慶應義塾図書館・新館” **ina REPORT** No. 40, p. 18-22.

“慶應義塾図書館・新館 榎総合計画事務所” **建築文化** Vol. 37 No. 428, p. 49-63.

“慶應義塾図書館・新館 榎総合計画事務所” **新建築** Vol. 57 No. 6, p. 151-173, 266-7.

“慶應義塾図書館新館が完成—高機能, 格調高いデザインの書架・閲覧席を納入—” **ライフ・スケープ** Vol. 6 No. 21, p. 17-9.

“慶應義塾図書館(新館)の開館披露式典” **慶應**

- 義塾大学報 No. 131, p. 4.
- “慶應義塾図書館(新館)の開館披露式典” 塾
Vol. 20 No. 3, p. 34-5.
- “建築と美術の出会い—「慶塾図書館」オープン—
〈NEWS(デザイン)〉” 芸術新潮 Vol. 33
No. 6, p. 10-11.
- “建築と美術の実験的出会い 慶應義塾図書館に
4作品導入” 朝日新聞(6月14日夕刊), p. 5.
- “規模・機能ともに拡充 三田新図書館オープン”
慶應塾生新聞 No. 145(4月10日), p. 1.
- “こちらは学問のすすめ 広さ大学一図書館完成”
朝日新聞(4月8日朝刊), p. 23.
- 神山四郎 “新・旧図書館のあいだ” 塾 Vol. 20
No. 3, p. 1.
- “三田山上に新図書館竣工” 慶應通信 No. 406,
p. 2.
- 榎文彦 “慶應義塾新図書館の完成” 三田評論
No. 823, p. 56-61.
- 榎文彦 “最近の設計から(Ⅲ)慶應義塾図書館・
新館をめぐって” 新建築 Vol. 57 No. 6, p.
174-177.
- 松田淑子 “他大学ものぞいてみました。〈図書館
雑学事典〉” 独協大学ニュース No. 137, p.
5.
- “モニュメント性“新鮮な復活” 近代建築のセオ
リーの中で—慶大の新図書館” 読売新聞(6
月17日夕刊), p. 7.
- 村上正昭 “慶應義塾図書館新館(設計:榎総合
計画事務所)〈ニュース 建築〉” 日経アーキ
テクチュア No. 161, p. 86-91.
- “日本一の設備です 慶應義塾図書館長 高鳥正夫
〈人〉” 毎日新聞(3月27日朝刊), p. 2.
- 岡部昭彦 “新図書館を訪ねて—行き届いた設計
者の神経—〈父兄の塾内訪問④〉” 塾 Vol.
20 No. 3, p. 22-5.
- “線形のある階段手摺子 慶應義塾図書館・新館/
榎総合計画事務所〈今日のディテール〉” デ
ィテール No. 73, p. 56-7.
- 渋川雅俊 “慶應義塾大学三田情報センター 慶應
義塾図書館・新館” 大学図書館研究 No. 20,
p. 125-37.
- “私大デラックス図書館 続々” サンケイ新聞
(5月26日朝刊), p. 3.
- “新図書館開館” 三田評論 No. 825 巻頭グラビ
ア
- “新図書館開館” 撮影 畔田藤治 塾 Vol. 20
No. 3, p. 17-20.
- “新図書館を訪ねて” 慶應通信 No. 414, p. 3.
- “新図書館利用の塾生達—1日の入館者8,000人の
日も—〈八角塔〉” 慶應義塾大学報 No. 134,
p. 15.
- “新図書館—利用者の立場から—〈座談会〉” 出
席者:紀田順一郎 堀田一善 鷺見誠一 渋川
雅俊 司会:高官利行 慶應義塾大学報 No.
132, p. 6-9.
- “竣工なった三田の大学図書館” 塾 No. 111 表
紙裏
- “対談 慶應義塾図書館(新館)の竣工” 榎文彦
高鳥正夫 慶應義塾大学報 No. 129, p. 2-5.
- 高鳥正夫 “大学における図書館の役割 慶應義
塾図書館新館の竣工をめぐって” 塾 No. 111,
p. 10-3.
- 高鳥正夫 “完成した新図書館” 塾友 No. 298
p. 2, p. 14-17.
- “鼎談 新図書館と図書館利用について” 高鳥正
夫 渋川雅俊 高官利行(司会) 三色旗 No.
407, p. 8-19.
- 渡辺茂男 “新図書館見てある記” 絵・根本進
三田評論 No. 828, p. 74-9.
- 八代修次 “新図書館の美術品” 塾 Vol. 20 No.
No. 3, p. 21.
- 横尾忠則 “ジェニファー・パートレットの壁画
「日本の海で」〈美術の“現場”2〉” 流行通信
No. 223, p. 144-5.
- この書誌は昭和57年9月30日までに三田情報セ
ンター総務課で入手した資料に基づいて作成し
た。収録漏れとなった文献にお気づきの方には総
務課まで是非お知らせ下さるようお願い致しま
す。

資料 II

年次統計要覧 <昭和56年度>

慶應義塾大学研究・教育情報センター

I. 図書費 <56年度実績及び57年度予算>

内訳 支部センター	55年度実績 <単位:円>			56年度予算 <単位:千円>		
	図書支出	図書資料費	(計)	図書支出	図書資料費	(計)
三田情報センター	458,316,747	1,697,999	460,014,746	524,560	1,836	526,396
図書館	244,136,747	1,697,999	245,834,746	277,954	1,836	279,790
研究室*	214,180,000	—	214,180,000	246,606	—	246,606
(私大研究設備相当額)	(17,820,000)	—	**			
(中近東研究基金)	—	(5,000,000)	**			
日吉情報センター	102,904,170	1,659,640	104,563,810	114,055	1,760	115,815
図書館	40,331,706	1,659,640	41,991,346	43,367	1,760	45,127
研究室*	62,572,464	—	62,572,464	70,688	—	70,688
(私大研究設備相当額)	(6,048,000)	—	**			
医学情報センター	95,637,276	1,607,720	97,244,996	104,320	—	104,320
"	95,637,276	1,607,720	97,244,996	104,320	—	104,320
理工学情報センター	137,384,838	1,160,070	138,544,908	92,642	1,230	93,872
"	137,384,838	1,160,070	138,544,908	92,642	1,230	93,870
(私大研究設備相当額)	(1,300,000)	—	**			
合 計	794,243,031	6,125,429	800,368,460	835,544	4,826	840,403

注) * 特別図書費は含まず。

** () 内は合計欄に加算せず

私大研究設備相当額は私大研究設備助成金に相当するよう義塾が臨時的に手当したものの。

本部の図書費は三田情報センター・図書館に含める。

II-1 蔵書統計 <年間受入及び所蔵冊数>

支部センター	内 訳	単 行 本			製 本 雜 誌			合 計	
		和	洋	計	和	洋	計		
年間受入冊数	三田情報センター	23,194	27,424	50,618	7,032	6,087	13,119	63,737	
	図 書 館	(15,338)	(15,396)	(30,734)	(2,810)	(2,331)	(5,141)	(35,875)	
	研 究 室	(7,856)	(12,028)	(19,884)	(4,222)	(3,756)	(7,978)	(27,862)	
	日吉情報センター	12,588	5,856	18,444	1,050	947	1,997	20,441	
	図 書 館	(9,186)	(2,300)	(11,486)	(922)	(24)	(946)	(12,432)	
	研 究 室	(3,402)	(3,556)	(6,958)	(128)	(923)	(1,051)	(8,009)	
	医学情報センター	1,655	1,528	3,183	1,160	2,713	3,873	7,056	
	理工学情報センター	1,923	2,379	4,302	944	4,383	5,327	9,629	
	合 計	39,360	37,187	76,547	10,186	14,130	24,316	100,863	
	所蔵冊数 (累計)	三田情報センター	478,868	432,345	911,213	117,972	93,783	211,755	1,122,968
		図 書 館	(355,581)	(254,198)	(609,779)	(63,906)	(41,744)	(105,650)	(715,429)
		研 究 室	(123,287)	(178,147)	(301,434)	(54,066)	(52,039)	(106,105)	(407,539)
日吉情報センター		158,187	81,306	239,493	16,006	21,142	37,148	276,641	
図 書 館		(109,722)	(11,789)	(121,511)	(10,722)	(222)	(10,944)	(132,455)	
研 究 室		(48,465)	(69,517)	(117,982)	(5,284)	(20,920)	(26,204)	(144,186)	
医学情報センター		21,187	23,577	44,764	36,655	70,018	106,673	151,437	
理工学情報センター		28,619	17,589	46,208	26,593	71,547	98,140	144,348	
合 計		686,861	554,817	1,241,678	197,226	256,712	453,716	1,695,394	

注1) 所蔵冊数(累計)は年間受入冊数から除籍冊数を引いた数値を前年度の累計所蔵冊数に加えたもの
 2) 三田情報センター・研究室には図書館・情報学科の製本雑誌を含む。

II-2 蔵書統計 <逐次刊行物：タイトル数>

種別 支部センター	カレント			ノンカレント			カレント・ ノンカレント 合計
	和	洋	計	和	洋	計	
三田情報センター	4,558	2,589	7,147	4,734	1,940	6,674	13,821
図書館	(1,618)	(655)	(2,273)	(2,896)	(1,106)	(4,002)	(6,275)
研究室	(2,940)	(1,934)	(4,874)	(1,838)	(2,672)	(2,672)	(7,546)
日吉情報センター	652	504	1,156	183	444	627	1,783
図書館	(405)	(17)	(422)	(93)	(3)	(96)	(518)
研究室	(247)	(487)	(734)	(90)	(441)	(531)	(1,265)
医学情報センター	1,127	1,414	2,541	645	982	1,627	4,168
理工学情報センター	964	1,108	2,072	1,243	2,036	3,279	5,351
合計	7,300	5,616	12,916	6,805	5,402	12,207	25,123

注) 三田情報センター・研究室には図書館・情報学科を含む。

III-1 利用統計 <貸出及び閲覧冊数>

内訳 支部センター	館外貸出			館内閲覧		前年度比 館外貸出(計)
	教職員	学生	(計)	一般図書	貴重書	
三田情報センター	9,678	64,627	74,305	—	1,274	1.06
図書館	(4,289)	(60,872)	(65,161)	93,426	969	1.05
研究室	(5,389)	(3,755)	(9,144)	*	—	1.17
日吉情報センター	4,253	42,552	46,805	*	—	1.02
図書館	(935)	(42,552)	(43,487)	*	—	1.00
研究室	(3,318)	—	(3,318)	*	—	1.35
医学情報センター	—	—	44,266	*	—	1.11
理工学情報センター	—	—	26,296	*	—	1.39

* 開架のため実数不明

III-2 利用統計 <相互貸借(複写依頼を含む)>

内訳 支部センター	依頼を受けた(貸)			依頼した(借)			合計
	国内	国外	計	国内	国外	計	
三田情報センター	789	3	792	425	115	540	1,332
日吉情報センター	112	2	114	48	1	49	163
医学情報センター	8,879	51	8,930	2,462	107	2,569	11,499
理工学情報センター	28,285	1	28,286	1,271	132	1,403	29,689
合計	38,065	57	38,122	4,206	355	4,561	42,683

III-3 利用統計 <複写サービス>

内 訳 支部センター	種 別	学 内		学 外		合 計	
		件 数	枚 数	件 数	枚 数	件 数	枚 数
三田情報センター	M F	11	2,684	5	356	16	3,040
	ゼロックス	11,611	303,953	705	27,899	12,316	331,852
	リコピー	61	10,784	—	—	61	10,784
	オフセット	208	201,445	—	—	208	201,445
	P P C	—	—	—	—	—	489,469
O H P	7	17	—	—	7	17	
日吉情報センター	ゼロックス	6,362	41,222	103	1,933	6,465	43,155
	P P C	—	235,125	—	—	—	235,125
医学情報センター	M F	—	5,738	—	—	—	5,738
	ゼロックス	49,642	362,331	29,049	182,333	78,691	544,664
理工学情報センター	M F	18	1,950	—	—	18	1,950
	ゼロックス	19,927	242,129	28,285	309,404	48,212	551,533
	O H P	230	1,611	—	—	230	1,611

注) P P Cはコイン方式のため内訳は不明

III-4 利用統計 <レファレンスサービス>

利用者別

内 訳 支部センター	学 内 者		学 外 者	合 計
	教 職 員	学 生		
三田情報センター	1,002	6,062	2,079	9,143
日吉情報センター	301	1,267	144	1,712
医学情報センター	—	—	—	4,393
理工学情報センター	619	2,700	1,602	4,921
合 計	—	—	—	20,169

業務内容別

内 訳 支部センター	文献所在調査	事項調査	利用指導	その他	合 計
三田情報センター	2,976	500	5,667	—	9,143
日吉情報センター	538	310	861	3	1,712
医学情報センター	987	67	248	3,091	4,393
理工学情報センター	1,950	115	2,745	111	4,921
合 計	6,451	992	9,521	3,205	20,169

本日、12月8日は日米戦争が始まった日と言うことで、世間ではその話題で持ちきりです。しかし私は別の想いでこれを記しています。と言うのも、ちょうど一年前のこの日に三田の新図書館の竣工式があり、それからいままで私たちは移転、開館準備、開館、新体制における諸々の問題への対応と、文字通り、息つく隙なく立ち働いてきて、ようやく一息つけるところまでできたからです。

本部事務室を含め三田情報センターの一人一人がこの一年大変な苦勞をしてきました。この一年間と言うよりも、この数年間とすべきかもしれません。この間皆が新図書館のことを四六時中心に掛けてきました。しかし、最も大変な思いをしたのは、高鳥正夫前所長と大江晃所長でしょう。新図書館に対する情報センタースタッフの考えや意見をとりまとめ、仕事を指揮されてきただけでなく、教員の要望を聴き、理事者や学部長との交渉や、ときには設計事務所との交渉まで当ってこられたからです。この間の緊張した状況がもっと長く続いたら、もしかしたら病人が幾人か出たかもしれません。

そんな苦勞の末ででき上がった新図書館は、塾内外で極めて好評で関係者各位、内心大変満足しているようです。風間茂彦が塾生1000名を対象とした新図書館に対する意見をまとめていますが、「この図書館を使えて幸せである」とする回答が84%を超えています。塾外から多くの見学者が相ついでいる(p. 10「新図書館と見学」)こともこの図書館が評判になっている現われの一つですし、学生新聞や三田評論をはじめ塾内の機関誌はもとより、各テレビ放送や朝日、毎日、サンケイ、読売新聞が、「日本一の大学図書館」と報じたのは、多少面映ゆい気持ですが、嬉しかったことも事実です(新図書館についての書誌)。この図書館が

現状本当に日本一かどうかは、また別の客観的評価を待つ必要があると思いますが、日本一たるべく心掛けは皆が持っており、三田情報センター各業務の中心者が新館開館に当って今後の展望をはっきり示しています。

慶應義塾は来年創立125周年を迎えますが、その記念行事として、日吉にも新図書館が建設されることになり、その計画が進められています。このことは、衛藤駿新日吉情報センター所長の抱負に述べられていますが、日吉情報センタースタッフはこれからが大変で、しばらくの間、盆も暮も正月もなく、新図書館一途に努力することになります。

日吉新図書館については、恐らく、来年の号の主要な記事となるでしょう。

これで私たちは、二つの新図書館施設を持つことになります。図書館の施設は、蔵書、職員、図書館内部装置などと共に、十分な図書館サービスを利用者に提供するための基盤を構成する要素ですが、全塾情報センターの中で二つのセンターが、施設の面で、今後20年間の発展が保証されます。医学情報センターは、昭和12年に建設された北里図書館内部を改善しながら、日本の医学図書館界の中心的役割を担ってきていますが、施設的には、限界を超えていると言って良いでしょう。理工学情報センターの松下記念図書館は昭和47年に建設され、比較的新しい図書館ですが、最近の科学技術の進歩、理工学部自体の発展により、すでに施設的な問題が表面化してきています。慶應義塾の学問、研究の発展は、図書館だけが負うものではありませんが、図書館が重要な役割を果たすことは事実であり、そのためにもこれら両センターが一日も早く充実した施設の持てることを期待しつつ、KULIC 16号の編集雑感とします。

(渋谷)